

令和7年度 卒業論文

AI生成文からみた「自然な日本語」についての研究

広島大学文学部人文学科
日本・中国文学語学コース
日本文学語学専攻
B226045 大西 夢

目次

- 1 はじめに
- 2 先行研究
 - 2-1 生成 AI について
 - 2-1-1 生成 AI の歴史
 - 2-1-2 生成 AI の普及
 - 2-2 AI 検出研究について
 - 2-2-1 日本語テキストを対象とする生成 AI 検出研究について
 - 2-2-2 英語テキストを対象とする生成 AI 検出研究について
 - 2-3 生成 AI の文章の読者評価について
- 3 調査方法
 - 3-1 予備調査
 - 3-2 本調査
- 4 調査結果
 - 4-1 予備調査の結果
 - 4-2 本調査の結果
- 5 考察
 - 5-1 AI 生成文に見られる特徴とその要因について
 - 5-2 「AI らしさ」についての認識
 - 5-2-1 「AI らしさ」という規範からのずれ
 - 5-2-2 認識しやすい「AI らしさ」と認識しにくい「AI らしさ」
 - 5-3 人間らしい「自然な日本語」とは何か
- 6 おわりに
- 7 参考文献
- 8 補助資料
 - 8-1 予備調査におけるアンケート
 - 8-2 本調査のテキスト

本論文では、AI が生成する文章を「AI 生成文」、人間が執筆する文章を「人間執筆文」とする。

1.はじめに

近年、AI 関連技術のめざましい発展により、AI が生成した文章や画像などを目にする機会が増えている。特に文章生成においては既に実用的なレベルにまで達しており、ビジネスから日常のやり取りまで、さまざまな場面で活用されている。現在普及している生成 AI は、技術的な進歩によって人間が書いた文章とさほど変わらない自然な日本語を生成することができるようになり、人員削減や作業の効率化をもたらしている一方で、それがかえってさまざまな問題を引き起こしている現状がある。例えば、近年では生成 AI を使用したフェイクニュースやフィッシング詐欺などが問題になっており、生成 AI が犯罪に悪用されてしまうケースも増えている。また、AI 生成文と人間執筆文との見分けがつかなくなったことで、個人の創造性や独自性が求められる教育や学術的な分野においては、創作物の評価に生成 AI の不正使用の有無を確認する必要性が生じている。その判定にはいわゆる「AI チェッカー」と呼ばれる AI 使用の有無を機械学習によって判別するツールが用いられることも少なくないが、その「AI チェッカー」もまた AI であるため、その精度が 100% になることはなく、最終的な判断は人間に委ねられる。もはや現代においては AI 生成文と人間執筆文とを完全に見分けることは不可能であるかのようにも思われるが、一方で依然として AI 生成文の「不自然さ」や「AI らしさ」が色濃く感じられるものを目にすることもあるのではないだろうか。完成度が極めて高い AI 生成文であっても、所々に垣間見える機械的な表現に対する言語化できない違和感が確かに存在していると筆者は感じている。そういった AI 生成文に抱く「不自然さ」「AI らしさ」といった印象をもたらす要因が AI 生成文のどこにあるのか、そして反対に私たちが AI らしくないと判断する「自然な日本語」とはどのようなものであるのかについて示した研究は管見の限りでは見つけられなかった。よって、本研究では、AI 生成文に対する「不自然さ」を分析し、「AI らしさ」を構成する要素や言語的特徴を明らかにすることで、逆説的に人間的な「自然な日本語」とはどのようなものであるかを示すことを目的とする。

なお、AI・生成 AI については、総務省・経済産業省「AI 事業者ガイドライン（第 1.1 版）」において以下のように定義されている。

・ AI

「AI システム（活用の過程を通じて様々なレベルの自律性をもって動作し学習する機能を有するソフトウェアを要素として含むシステム）」自体又は機械学習をするソフトウェア若しくはプログラムを含む抽象的な概念。

・ 生成 AI

文章、画像、プログラム等を生成できる AI モデル（学習データを用いた機械学習によって得られるモデル）にもとづく AI の総称。

（総務省・経済産業省（2025）「AI 事業者ガイドライン（第 1.1 版）」より抜粋）

2. 先行研究

2-1 生成 AI について

2-1 では以下、総務省が発行する「令和 6 年度版 情報通信白書」を参照している。

2-1-1 生成 AI の歴史

人間等の知的活動をコンピュータにより再現する人工知能（Artificial Intelligence：AI）は長年開発されてきたが、2022 年頃から急速に普及した生成 AI は開発の進化の飛躍的な例である。

AI の歴史は 1950 年代から始まっている。第 1 次 AI ブームは、目的達成のために手順や選択肢を調べ、最適な解決策を見つけ出す「探索」、人間の思考過程を記号で表現し実行する「推論」から始まった。人工知能の概念が確立し、科学者たちに AI という言葉が認知されるようになり、AI の研究開発が活発化したのである。しかし、コンピュータの性能面で限界があり次第に冬の時代を迎えた。その後 1980 年代には、コンピュータの高性能化が進み、AI の研究開発が再び活発化した。これが第 2 次 AI ブームである。第 2 次 AI ブームでは音声認識等が組み込まれたが、依然として性能面が不十分であったため、学習データの処理に大変な労力が必要であることから、再び冬の時代を迎えた。それを経た 2000 年代からの第 3 次 AI ブームは機械学習の時代であった。ディープラーニングをはじめとした革新的な技術が登場したことで、画像認識や自然言語処理、シミュレーションなどができるようになり、社会に普及していった。2022 年頃からの生成 AI の急速な普及は第 4 次 AI ブームとも言われている。

2-1-2 生成 AI の普及

ディープラーニングの基盤技術により、AI の性能が飛躍的に向上したことで、様々なコンテンツを生成できる生成 AI が誕生した。2022 年の OpenAI による対話型 AI “ChatGPT”の発表を契機に特に注目された分野である。ChatGPT は、公開からわずか 5 日で 100 万ユーザー、2 か月で 1 億ユーザーを突破するという驚異的なスピードでユーザー数を拡大させている。このブームの背景として、まず、ディープラーニングやトランスフォーマーモデルの開発・大規模化により、モデルの精度が飛躍的に向上したことが挙げられる。そしてさまざまなタスクに適用可能な知識を獲得した基盤モデルや大規模言語モデルの登場により、開発や利用が大幅に容易化されるとともに、AI がより複雑なタスクをこなせるようになり、その有用性が広く認知された。また、クラウドコンピューティングの発展や GPU（Graphics Processing Uni）の進化によって、より広範な分野での活用が可能になったことや、AI との対話がより身近なものとなり、直感的で使いやすくなったこと、人間の意図・価値観に合わせて AI を振る舞わせる仕組みができたこと等により、一層有用性がより高まったといえる。

2-2 AI 検出研究について

2-2-1 日本語テキストを対象とする生成 AI 検出研究について

日本語テキストを対象とする生成 AI 検出研究は極めて少ない。しかしながら Wataru Zaitzu, Mingzhe Jin (2023) は日本語テキストにおいて、AI 生成文の統計的特徴を発見した。それを MDS を用いて解析したところ、AI 検出率が 98.1% の精度であった。Wataru Zaitzu, Mingzhe Jin (2023) が明らかにした AI 生成文の統計的特徴が以下の通りである。なお、() 内の日本語訳は筆者による。

- (1) bigrams of parts-of-speech (品詞のバイグラム)
- (2) bigram of postpositional particle words(後置語のバイグラム)
- (3) positioning of commas (読点の位置)
- (4) rate of function words (機能語の使用率)

以上の四点のうち、最も顕著な特徴は (4) rate of function words (機能語の使用率) で、次が (1) bigrams of parts-of-speech (品詞のバイグラム) であった。

2-2-2 英語テキストを対象とする生成 AI 検出研究について

日本語の文章を対象とする AI 検出ツールの関連研究はまだ少ないが、英語圏では Detect GPT をはじめとするさまざまな AI 検出ツールの開発が進んでいる。Heather Desaire, Aleesa E. Chua, Madeline Isom, Romana Jarosova, David Hua (2023) は、英語で書かれた学術論文と AI (ChatGPT) で生成した論文とを比較し、それぞれの文章に見られる特徴を整理した上で、両者を区別するための 4 分類 20 項目を設定した。彼らの示した分類は以下の通りである。なお、() 内の日本語訳は筆者による。

- (1) paragraph complexity (段落の複雑さ)
 - 1 sentences per paragraph (段落ごとの文章数: 多い方が人間)
 - 2 words per paragraph (段落ごとの単語数: 多い方が人間)
- (2) differential usage of punctuation marks (句読点の使用の違い)
 - 3 “” present (「」の出現: 多い方が人間)
 - 4 “-” present (「-」の出現: 多い方が人間)
 - 5 “;” or “:” present (「;」もしくは「:」の出現: 多い方が人間)
 - 6 “?” present (「?’」の出現: 多い方が人間)
 - 7 “‘” present (「’」の出現: 多い方が ChatGPT)
- (3) sentence-level diversity in length (文レベルの長さの多様性)
 - 8 standard deviation in sentence length (文の長さの標準偏差: 多い方が人間)
 - 9 length difference for consecutive sentences (連続した文の長さの違い: 多い方が人間)
 - 10 sentence with <11 words (11 語より少ない文: 多い方が人間)
 - 11 sentence with >34 words (34 語より多い文: 多い方が人間)
- (4) different “popular words” (よく使われる語の違い)

- 12 contains “although” (「although」を含む：多い方が人間)
- 13 contains “However” (「However」を含む：多い方が人間)
- 14 contains “but” (「but」を含む：多い方が人間)
- 15 contains “because” (「because」を含む：多い方が人間)
- 16 contains “this” (「this」を含む：多い方が人間)
- 17 contains “others” or “researchers” (「others」もしくは「researchers」を含む：多い方が ChatGPT)
- 18 contains numbers (数値を含む：多い方が人間)
- 19 contains 2 times more capitals than “.” (「.」の2倍の数の大文字を含む：多い方が人間)
- 20 contains “et” (「et」を含む：多い方が人間)

以上の分析から、彼らは4分類20項目の観点から文章を解析し、独自の算出方法でAIテキストを検出するデータセットを開発した。この特徴はChatGPTが人間よりも単純な内容を生成することと、人間が好む多様な文章構造を再現できないということを示しており、これは論文以外の異なる文体の文章でも一貫していると述べている。

2-3 生成AIの文章の読者評価について

仁谷、鎗分、山本、町田、須藤(2023)は、新聞記事とGPT-4の文章の信頼性を因子分析により調査し、人間執筆文とAI生成文の読者認識の違いを明らかにする研究を行った。調査ではGPT-4が生成している文章であることを回答者に知らせずに、文章の信頼性を問う計21項目の設問について評価させている。調査の結果、人間執筆文よりもGPT-4が生成した文章の方が、「信頼できる文章である」と評価されていることに加えて、GPT-4による文章と人間執筆文を読み取る際の信頼性判断における感じ方の違いが生じていることが明らかとなった。人間執筆文では、信頼性判断の動機尺度が〈整合性〉因子、〈論理的〉因子、〈魅力的〉因子、〈簡潔性〉因子の4因子構造となっており、特に〈論理性〉と〈整合性〉の因子が高くなっていることから、論理的で整合性のとれた文章であることが信頼性を評価する上で重要視されることが分かった。一方のGPT-4の生成した文章では、〈可読性〉因子、〈有益性〉因子、〈面白さ〉因子の3因子構造であり、その中でも〈有益性〉因子が最も高くなっていることから、GPT-4の文章においては、適切な情報量とわかりやすさ、エンゲージメントに関する点が重視されていることが明らかとなった。以上のことから、人間執筆文を読むときとGPT-4の文章を読むときでは、信頼性を判断する因子が異なっており、文章の感じ取り方や評価観点の違いが生じていることを示した。

3.調査方法

調査は、予備調査と本調査の2回行った。

3-1 予備調査

本調査に先立ち、Microsoft forms を使用して「AIらしさ」「人間らしさ」についての認識を調べる小規模のアンケート調査を行った。調査は2025年11月18日（火）～12月31日（金）の期間に実施し、20代の男女16名（男:6:女10）からの回答を得た。回答者の年代については、AIについての知識量による回答のばらつきを抑えるため、AIに日常的に触れていると予想される20代に限定することとした。

予備調査では、さまざまな文体のAI生成文を6本、人間執筆文を3本用意し、それぞれをランダムに並び替えて評価させた。ビジネス文書や新聞などのフォーマルでかたい文章から、SNSや個人的なやり取りといったカジュアルでやわらかい文章まで幅広い文体を扱い、ジャンルによる違いも調査した。使用した文章のジャンルは以下の9種類である。

- 【文章1】 新聞記事
- 【文章2】 ビジネスメール
- 【文章3】 意見文
- 【文章4】 ブログ
- 【文章5】 小説（書き出し）
- 【文章6】 ¹エッセイ（章の冒頭）
- 【文章7】 メッセージのやり取り
- 【文章8】 手紙
- 【文章9】 日記

このうち、AI生成文は【文章1】【文章2】【文章4】【文章5】【文章7】【文章8】の6つ、人間執筆文は【文章3】【文章6】【文章9】の3つである。また、予備調査に用いる文章サンプルの生成には、「ChatGPT(GPT-3.5)」「Claude」「Gemini」「Copilot」「Grok」を使用した。生成の際には、それまでの出力の履歴を消し、全てのAIに同じ指示を入力した。生成日は2025年11月12日でプロンプトは以下の通りである。

- 【文章1】 新聞記事
「政治経済に関する新聞記事を300字程度で生成してください。」
- 【文章2】 ビジネスメール
「書類不備に対する謝罪のビジネスメールを全て合わせて300字程度にして生成してください。」
- 【文章4】 ブログ
「カフェ巡りについてのブログを300字程度で生成してください。」
- 【文章5】 小説（書き出し）
「長編小説の書き出し部分の300字程度を生成してください。」

¹ エッセイについては、彬子女王・ほしよりこ(2025)『飼い犬に腹を噛まれる』（PHP 研究所）より、「飼い犬に腹を噛まれる」の冒頭283字を引用した。

【文章7】 メッセージのやり取り

「AさんBさんの卒業旅行についてのメッセージのやり取りを全て合わせて300字程度で生成してください。」

【文章8】 手紙

「友人の誕生日を祝う手紙を300字程度で生成してください。」

生成されたそれぞれの文章のうち、字数の制限（250字～350字）を満たすもののみを抽出し、アンケート調査に使用する文章を無作為に選んだ。実際にアンケート調査に使用した文章については補足資料に掲載がある。また、アンケート項目の具体的な内容は以下の通りである。

(1) 10段階評価

各項目の文章に対する印象を「非常に不自然」から「非常に自然」までの10段階、「非常に読みにくい」から「非常に読みやすい」までの10段階、「書き手の感情が全く伝わらない」から「書き手の感情が非常に伝わる」までの10段階、「AIらしい」から「人間らしい」までの10段階で評価させる。

(2) 文章に対する自由記述評価

また、(1)について、それぞれ「AIらしい」「人間らしい」と感じた点について自由記述にて記述させる。

3-2 本調査

本調査では、予備調査で得られた結果をもとに、「AIらしさ」「人間らしさ」の特徴について、新たに生成したAI生成文と人間執筆文とで比較検討を行い、予備調査の（結果2）で得られた回答が実際の傾向として現れるか、また、AI生成文と人間執筆文との間に構造的な違いが生じているかを確認する。予備調査を通して、「AIらしさ」の要因の一つに内容の抽象性があることが明らかとなったため、本調査で使用する文章は、ある程度想定される記述内容が決まっている【少子高齢化についての意見文】（以下【少子高齢化文】）と、内容や文体の自由度が高い【旅の思い出についての作文】（以下【思い出文】）に設定し調査を行った。本調査に用いる文章について、人間執筆文ではAI使用の禁止のみを条件として設定し、20代8人、50代2人の計10人にそれぞれ500字程度で執筆させた。AI生成文では、予備調査と同様に「ChatGPT(GPT-3.5)」「Claude」「Copilot」「Gemini」「Grok」を使用し、それぞれに各テーマ2つずつ生成させた。生成の際にはプロンプトは全て統一し、その都度履歴は削除した。指定の文字数（450～550字）の文章が2つ生成できるまでそれを繰り返し、条件を満たすもののみを調査対象とした。生成時のプロンプトは以下の通りである。

【少子高齢化文】

「少子高齢化についての意見文を500字程度で生成してください。」

【思い出文】

「旅の思い出についての作文を 500 字程度で生成してください。」

なお、「ChatGPT(GPT-3.5)」については、【少子高齢化文】では、1 回目に指定の文字数の文章が生成できてからその後 30 回生成を行っても条件を満たす文章を生成できなかったため、31 回目の生成において 2 つ目のプロンプトとして「文字数を増やしてください。」と入力した。【思い出文】では、30 回生成を行っても条件を満たす文章をひとつも生成できなかったため、31 回目及び 32 回目の生成において、指定の文字数になるまで「文字数を増やしてください。」と入力した。

以上のように収集した人間執筆文と AI 生成文とを、さまざまな観点から分析・検討を行う。まず、予備調査の（結果 2）で得られた回答から、調査によって計量・計測が可能なもののみを抽出し、調査項目（①～⑩）とする。

- ①読点の使用
- ②一文の長さ
- ③段落の長さ
- ④文末の文法的特徴
- ⑤接続詞の使用
- ⑥抽象的な語の使用
- ⑦造語の使用
- ⑧固有名詞の使用
- ⑨感情を表現する語の使用
- ⑩比喩表現の使用

次に前述の英文での AI 生成文と人間執筆文のそれぞれの特徴を示した Heather Desaire, Aleesa E. Chua, Madeline Isom, Romana Jarosova, David Hua (2023) の研究における分類項目を踏まえ、上の①～⑩の調査内容を補足するとともに、①～⑩以外かつ日本語の意見文・作文でも調査可能な項目のみを抜粋し調査項目（⑪～⑬）とする。なお、（ ）内の日本語訳は筆者による。

- ⑪length difference for consecutive sentences （連続した文の長さの違い）
- ⑫10 sentence with <11 words （11 語より少ない文）
- ⑬11 sentence with >34 words （34 語より多い文）

※調査項目⑫・⑬については、数値の基準が英文であるため、本調査では使用する文章全ての一文の長さのうち、下から 10%までの文字数を⑫の数値に、上から 10%までの文字数を⑬の数値とすることとする。

また、「②一文の長さ」、「③段落の長さ」について、「②一文の長さ」では平均値だけでなく standard deviation in sentence length（文の長さの標準偏差）も算出し、「③段落の長さ」では長さの判断は、sentences per paragraph（段落ごとの文章数）及び words per paragraph（段落ごとの単語数※本調査においては字数とする）によって行う。

最後に、日本語における計量言語学の観点から、語彙の特徴や文体の特徴を統計的に分析する。調査項目は以下の⑭～⑯とし、具体的な方法については各項目で記述する。

⑭TTR (タイプ・トークン比)

異なり語数÷延べ語数で表される指標であり、語彙の多様性を示す。AI生成文及び人間執筆文を「web 茶まめ」²を用いて形態素解析し TTR を算出する。なお、形態素解析ツールでは複合語が分けて集計されるため、複合語の判定については手作業にて行った。

⑮語の意味

国立国語研究所編 (2004)『分類語彙表 増補改訂版』(以下『分類語彙表』)に基づき、出現語彙の意味的分類を行う。語彙の意味を分析することで、文章全体としての内容の傾向を比較することができる。調査項目⑯については、『分類語彙表』の「抽象的關係」に分類される語彙を集計することとする。『分類語彙表』における具体的な分類法のうち、本調査で用いるもののみを以下に示す。

〔分類1 類〕

- 1.体の類 (名称を表す語。名詞の類。)
- 2.用の類 (存在・活動を叙述する語。動詞の類。)
- 3.相の類 (状態を叙述する語。形容詞・形容動詞・副詞・連体詞の類。)
- 4.その他 (一部の副詞、接続詞、感動詞)

〔分類2 部門〕

- 1「抽象的關係」
- 2「人間活動の主体」
- 3「人間活動—精神および行為」
- 4「生産物および用具」
- 5「自然物および自然現象」

⑯語種構成比率 (品詞構成比率：単位語水準)

樺島・寿岳 (1965) は品詞比率によって文章の表現態度が推定できるとした。表現態度とは、樺島・寿岳が提唱した表現のあり方のことであり、「要約的表現 (骨組みを述べる)」と「描写的表現」のふたつがある。さらに「描写的表現」が枝分かれして「ありさま描写 (質、様子を述べる)」、「動き描写 (行動、変化を述べる)」となる。樺島・寿岳は、自立語をその働きから考えて「名詞 (=N)」「動詞 (=V)」「形容詞、形容動詞、副詞、連体詞 (=M)」「接続詞、感動詞 (=I)」の4つに分け、その比率と文章の表現性の関連を以下のように示した。なお、MVRとは比率Mに100をかけたものを比率Vでわった値である ($MVR=100M \div V$)。

² 「web 茶まめ」とは、国立国語研究所が提供する形態素解析処理及び形態素解析サービスである。

(<https://chamame.ninjal.ac.jp/>) システムの詳細については、堤智昭・小木曾智信 (2023)「複数のUniDic 辞書による形態素解析支援ツール『Web 茶まめ』の実装と運用」を参照されたい。

①名詞比率 N が大きく、MVR が小さい文章には要約的な文章が多い。

②N が小さく、MVR が大きい文章にはありさま描写的な文章が多い。

③N が小さく、MVR が小さい文章には動き描写的な文章が多い。

この樺島・寿岳の説によって、本調査においても語の品詞比率の分析を行う。

以上の調査項目を分析のジャンルごとに分けて改めて通し番号（調査項目①～⑫）を付す。

調査項目①読点の使用

調査項目②一文の長さとその標準偏差

調査項目③一文の長さの上位 10%と下位 10%

調査項目④連続した文の長さの違い

調査項目⑤段落の長さ（文の数と字数）

調査項目⑥固有名詞と造語の使用

調査項目⑦接続詞の使用

調査項目⑧文末の文法的特徴

調査項目⑨感情表現・比喩表現の使用

調査項目⑩TTR（タイプ・トークン比）

調査項目⑪語種構成比率（品詞構成比率：単位語水準）

調査項目⑫語の意味

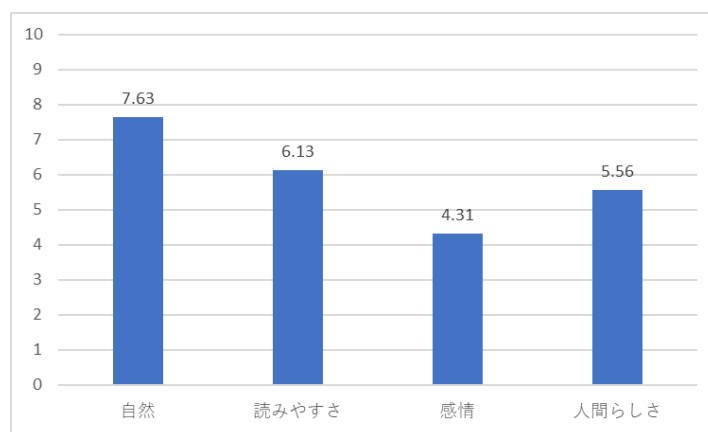
4.調査結果

4-1 予備調査の結果

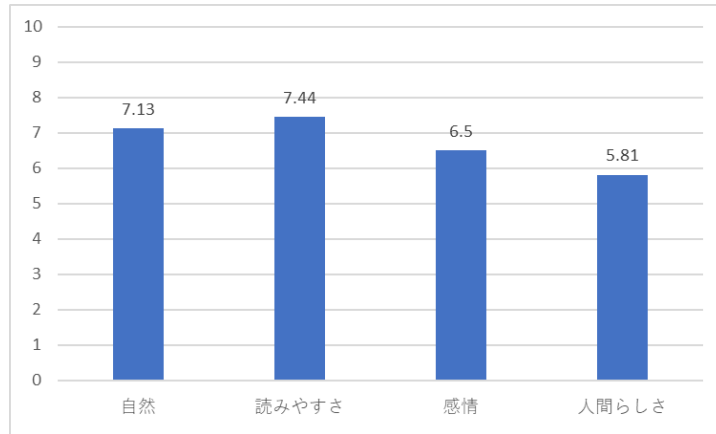
以下では、便宜上、文章の自然さについての評価を「自然スコア」（高いほど自然である）、読みやすさについての評価を「読みやすさスコア」（高いほど読みやすい）、書き手の感情についての評価を「感情スコア」（高いほど書き手の感情や人柄が伝わる）、AIらしさ・人間らしさについての評価を「人間らしさスコア」（高いほど人間らしい）とする。

（結果1）10段階評価

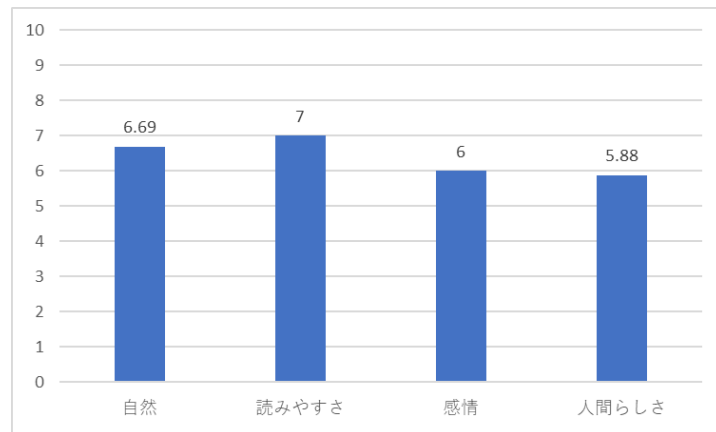
各 10 段階評価の平均値を以下の図に示す。



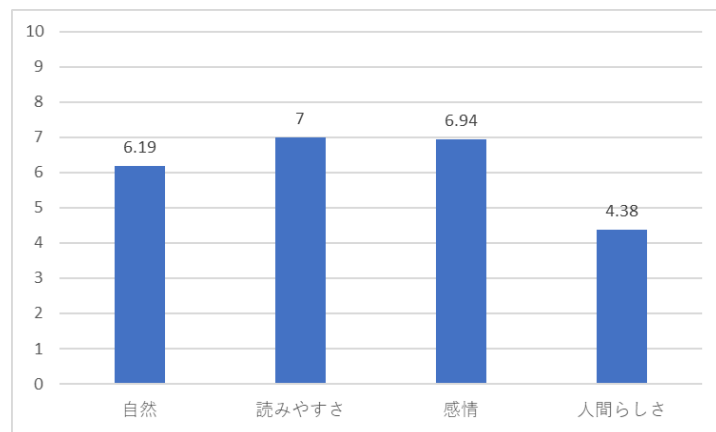
(図1) AI:【文章1 新聞記事】



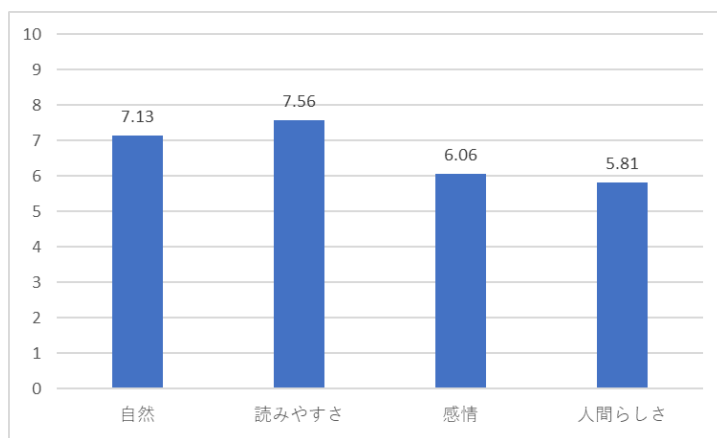
(図2) AI:【文章2 ビジネスメール】



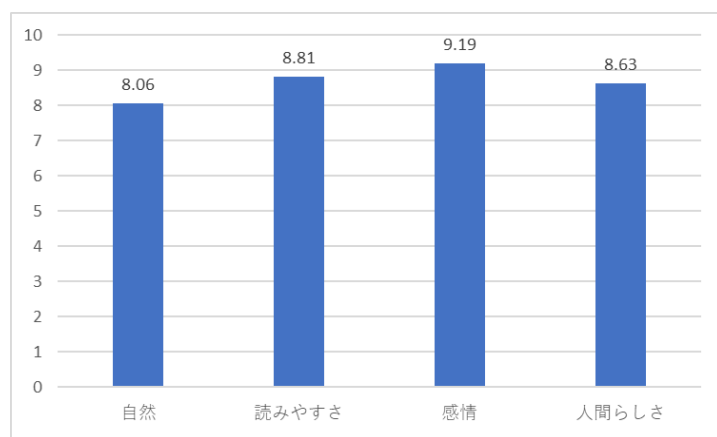
(図3) 人間:【文章3 意見文】



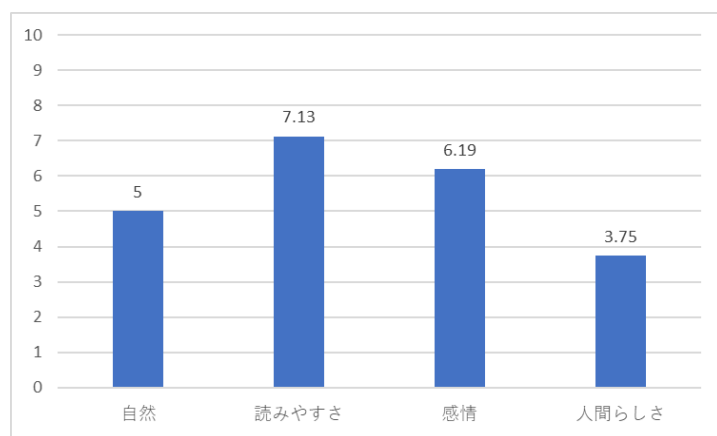
(図4) AI:【文章4 ブログ】



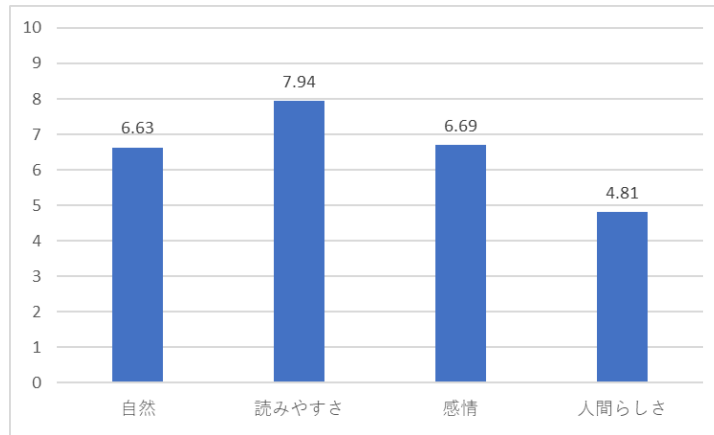
(図5) AI:【文章5 小説(書き出し)】



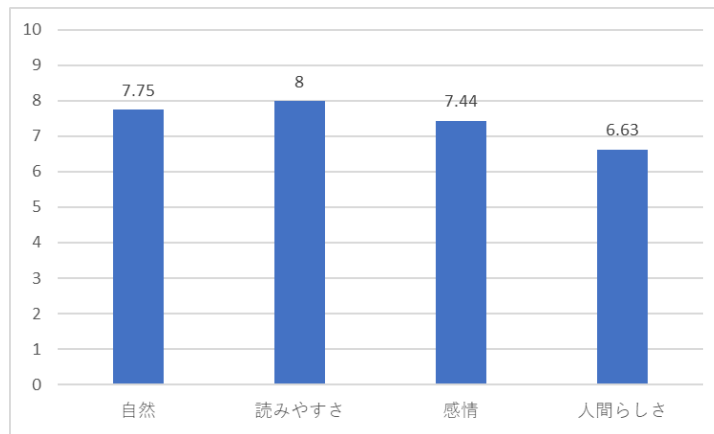
(図6) AI:【文章5 小説(書き出し)】



(図7) AI:【文章7 メッセージのやり取り】



(図8) AI:【文章8 手紙】



(図9) 人間:【文章9 日記】

(表1) 各項目の数値の順位

	自然	読みやすさ	感情	人間らしさ
文章1	3	9	9	6
文章2	4	5	5	4
文章3	6	7	8	3
文章4	8	7	3	8
文章5	4	4	7	4
文章6	1	1	1	1
文章7	9	6	6	9
文章8	7	3	4	7
文章9	2	2	2	2

※塗りつぶしは人間執筆文

以下で結果1から分かることを整理する。

まず、「自然スコア」について、全ての文章で平均値が5以上であったことから、著しく不自然だと感じられる文章はなかったことが分かる。しかし、「自然スコア」が最も低い【文章7】については、唯一半数以上が「自然スコア」を4以下と評価しているため、不自然さが残る文章であったことが推測できる。「自然スコア」が目立って高かった【文章6】【文章9】はともに人間執筆文であるものの、全体的にみてAI生成文と人間執筆文との間に「自然スコア」の明らかな差は認められなかった。また、「人間らしきスコア」との関連について、【文章1】【文章3】以外は「自然スコア」と「人間らしきスコア」が対応する形で評価されている。特に、【文章6】【文章7】【文章9】ではそれが著しく現れている。個々の回答においても、「自然スコア」と「人間らしきスコア」が極端に離れている回答は少なかった点から、回答者は文章が自然であれば人間らしく、不自然であればAIらしいという認識を持っているということが分かる。

次に「読みやすきスコア」について、【文章1】以外の全ての文章の平均値が7以上であった。また、【文章1】【文章6】を除く文章では、回答に大きな差がなく、おおむね全員が評価6～7程度の読みやすさであると評価している。【文章1】の「読みやすきスコア」が低かった理由としては、文章のジャンルによる違いが考えられる。【文章1】はかたい文体として用意した新聞記事の文章であり、内容も国家予算という政治的なものであったため、回答者にとってとっつきにくい文章であったということが考えられる。その他の文章は比較的身近なトピックなので、【文章1】が最も読みづらいと評価されたことにも頷ける。よって、文体による違い以外にAI生成文・人間執筆文間の「読みやすきスコア」の有意な差異はなく、「読みやすさ」と「AIらしさ」には関連性が認められないといえるだろう。

さらに「感情スコア」では、「自然スコア」「読みやすきスコア」と同様に【文章6】が最も高く、続いて【文章9】が高く評価されている。「感情スコア」が高い文章を見ると、「エッセイ」「日記」「ブログ」「手紙」など、比較的やわらかい文体で個人の感情や考えを記すものが多くなっており、反対に「感情スコア」が低い文章では「新聞記事」や「意見文」など、かたい文体で客観的事実を述べる箇所を含むという性格を持つ文章になっている。つまり、書き手の感情を反映させやすい文章では「感情スコア」が高く、書き手の感情を入れ込みにくい文章では「感情スコア」が低いということである。また、「感情スコア」にはAI生成文と人間執筆文による違いや、「人間らしきスコア」による違いが関連していない。したがって、「感情スコア」はその文章のジャンルや文体のみから判断されて評価されおり、その評価はほかの要素との影響関係を持たないということがわかる。

最後に「人間らしきスコア」について、上から【文章6】【文章9】【文章3】となっているが、これらは全て人間執筆文である。なかでも【文章6】【文章9】は4つの項目全てでそれぞれ1位・2位という高い評価を得ていることから、この2つの文章は他の文章と明確に区別されて、人間が書いたものであると認識されていることがわかる。また【文章3】についても、他の文章と大きな評価の差はないものの、「自然スコア」「読みやすさ

スコア」「感情スコア」で高く評価されていないにも関わらず、「人間らしきスコア」は三番目に評価されていることから、この文章には自然さや読みやすさ、感情以外の「人間らしき」の要素が内在していると言えるだろう。また、AI生成文に対する評価を見ると、かたい文体の【文章1 新聞記事】【文章2 ビジネスメール】と比較して、柔らかい文体の【文章4 ブログ】【文章7 メッセージのやり取り】【文章8 手紙】の「人間らしきスコア」が低く評価されていることがわかる。これはかたい文体では「AIらしき」が感じられにくく、柔らかい文体では「AIらしき」を感じやすいということを示しており、このことからAIはかたい文体を「人間らしく」生成することは得意であるが、柔らかい文体ではそれができないと推測することができるだろう。

以上を踏まえて、(結果1)を通してわかったことを下の①～④に示す。

- ①「自然スコア」と「人間らしきスコア」には関連性が認められる。
- ②「読みやすさスコア」・「感情スコア」は文章ジャンルや文体に依存しており、「人間らしきスコア」との関連性は認められない。
- ③「人間らしきスコア」はAI生成文よりも人間執筆文の方が高い。
- ④かたい文体よりも柔らかい文体の方が「AIらしき」が感じられやすい。

(結果2) 自由記述評価 (提示した文章について)

AIか否かについての認識の正誤問わず、「AIらしい」「人間らしい」と感じた点についての自由記述評価の回答を、

- (ア) 文法的特徴への言及
- (イ) 語彙への言及
- (ウ) 内容への言及
- (エ) 文章表現への言及
- (オ) その他

の5つのカテゴリーに分類した。なお、1回答で複数の要素について言及しているものは分けて集計している。回答は計148件であり、類似の回答が複数あるものを抜粋して以下に示す。

(ア) 文法的特徴への言及 回答全25件

- 「AIらしい」と感じた点
 - ・読点の使用への違和感 4件
 - ・一文が短い 2件
 - ・段落の変え方への違和感 2件
 - ・主語の明示 (【文章7 メッセージのやり取り】) 2件
 - ・絵文字・記号(！、?)の使用の違和感 (【文章7 メッセージのやり取り】) 2件

- 「人間らしい」と感じた点
 - ・（ ）の使い方（【文章6 エッセイ】） 3件
 - ・体言止めの使用 2件
 - ・接続詞が少ない 2件

(イ) 語彙への言及 回答全 18 件

- 「AIらしい」と感じた点
 - ・ある特定の語彙の使用（抽象的な語や一般的に使用しない語） 13件例：「福音」「迂回路」「あの夏」等
 - ・専門的な言葉が多い 2件

- 「人間らしい」と感じた点
 - ・ある特定の語彙の使用（造語や柔らかい表現、一般的に使用しない熟語など） 12件例：「バラマキ圧力」「福音」「うーんと」等

(ウ) 内容への言及 回答全 34 件

- 「AIらしい」と感じた点
 - ・具体性がない 14件（「テンプレートのよう」「誰にでも当てはまる」「当たり障りのない」などを含む）
 - ・現実では考えにくい事象 3件
 - ・内容の飛躍、突飛な表現 3件
 - ・予定調和的な内容 3件

- 「人間らしい」と感じた点
 - ・伏線のようなものがある 2件
 - ・個人の感想が書かれている 2件
 - ・具体的な内容 2件

(エ) 文章表現への言及 回答全 35 件

- 「AIらしい」と感じた点
 - ・わざとらしい（大げさな）感情表現 3件
 - ・説明的な表現の使用 2件
 - ・文末がワンパターン 2件

- 「人間らしい」と感じた点
 - ・同じ内容を言葉を変えて繰り返す 2件

- ・ 比喩表現の使用 2件
- ・ 感情表現の使用 2件

(オ) その他 回答全 36 件

○ 「AIらしい」と感じた点

- ・ 「暗黙の了解」がない（【文章7 メッセージのやり取り】） 2件

○ 「人間らしい」と感じた点

- ・ よくある新聞の体裁である（【文章1 新聞記事】） 3件
- ・ よくあるビジネスメールである（【文章2 ビジネスメール】） 2件
- ・ 人柄が伝わってきた 2件

以上の自由記述評価結果を踏まえ、分かったことを整理して以下に示す。

まず、「(ア) 文法的特徴への言及」について、文章の視覚的・形式的な要素への言及が目立った。特に、読点の使用については4件の同様の回答が得られており、いずれも読点の多寡や、使用への違和感を「AIらしさ」の要因として挙げている。「人間らしい」点としては心情表現に（ ）を用いたり、体言止めを使用したりしていることが挙げられている。

「(イ) 語彙への言及」については、文章中の特定の語を抜き出して、それらを「AIらしい」もしくは「人間らしい」要素として挙げている。「AIらしい」語として挙げられていたのは「あの夏」や「迂回路」といった具体的な数詞や固有名詞が出てこない抽象的な語や、「福音」といった一般的には使用しない語であり、自由記述回答では「違和感」「人が書いていたら〇〇は使わない」などといった言葉とともに記述されていた。一方で、「人間らしい」語として挙げられていたのは、「バラマキ圧力」などといった造語や「うーんと」「全然」「かも」などのくだけた語、そして「AIらしい」語としても挙げられた一般には使われにくい語である「福音」などである。注目すべきは「福音」が「AIらしい」とも「人間らしい」とも捉えられた点である。「AIらしい」とした回答では「難しい言葉をわざと使うのはAIっぽい」や「福音に他ならないというフレーズを一般的な人が使う想像がつかなかった」というように、通常なら人間はこの言葉を使わないだろうといった推測によって「AIらしい」と判断しているのに対し、「人間らしい」とした回答では「あえて「福音」という表現をこの文脈で用いるところが人間らしく感じた」「やや言い回しが仰々しく、一般的なAIがこのような文章を出力するとは考えにくい」というように、あまり使われにくい言葉だからこそAIはこのような言葉を出力しないと判断している。どちらにしても日常的に使われにくい語の使用に対して回答者は敏感に反応しており、そこに「AIらしさ」や「人間らしさ」を見出しているといえるだろう。

「(ウ) 内容への言及」では、その半数以上が「AIらしさ」に関する回答であった。「AIらしい」と感じた点の多くは内容の具体性の無さについての指摘であり、「テンプレート」「浅い」「薄い」「当たり障りのない」といった言葉で形容されている。「人間らしい」と感じた点についても内容が具体的であるといった回答があるため、抽象的であればAIらしく、具体的であれば人間らしいといった認識が回答者にあることが理解できる。また、「AIらしさ」の要因として、現実では考えにくい事象の描写や内容の飛躍なども挙げられた。具体的には「自分の店なのに「古びた書店の看板が目に入った」という表現は他人事すぎて不自然」などといったものであり、これらは総じてAI生成文における整合性のとれない描写や想像力の不足した表現に「AIらしさ」を感じ取っている。したがって、内容的な面では抽象的かつ整合性のない文章に「AIらしい」と感じるということがわかった。

「(エ) 文章表現への言及」では、同様の回答が複数あるものが少なかったが、文脈や文章ジャンルにそぐわない不適切な表現や文末表現の重複などが「AIらしい」と判断され、同じ言葉を使うことを避ける表現や比喩表現・感情表現の使用が「人間らしい」と判断された。特に、表現の重複については「AIらしい」点でも「人間らしい」点でも指摘されており、同じ言葉を何度も使うのがAI、言葉を変えるのが人間であると捉えられていることがわかる。

「(オ)」その他では、「人間らしい」点として「よくある〇〇だから」という回答が多かった。また、ジャンルの違いにより複数回答にはならなかったものの、「AIらしい」と感じた点として「～にしては〇〇すぎる」という表現の回答が6件あった。このことから、回答者には各ジャンルによってそれぞれの文体や内容についての規範意識のようなものがあり、そこから逸脱した文章に「AIらしさ」を感じていることが分かる。これはAIを、文脈に依った判断やその場に依った返答ができないものとして捉えていることの裏付けとなる。

(結果2) から分かることをまとめると以下の通りである。

- ①文章の内容には関わらない視覚情報も「AIらしさ」の要因になり得る。
- ②一般的には使用されない語が「AIらしさ」及び「人間らしさ」の判断材料になる。
- ③内容が具体的であれば「人間らし」く、抽象的もしくは整合性のとれないものであれば「AIらしい」と感じる。
- ④文章のジャンルに依った文体や内容の規範意識が判断材料になる。

4-2 本調査の結果

集計にあたり、人間執筆文のうち2つの文章の「,」を「、」に、「.」を「。」に変換した。また、AI生成文については便宜上以下のようにAI 1～AI 10と示すこととする。

AI 1 : Copilot①

AI 2 : Copilot②

AI 3 : Grok①

AI 4 : Grok②

AI 5 : Gemini①

AI 6 : Gemini②

AI 7 : Claude①

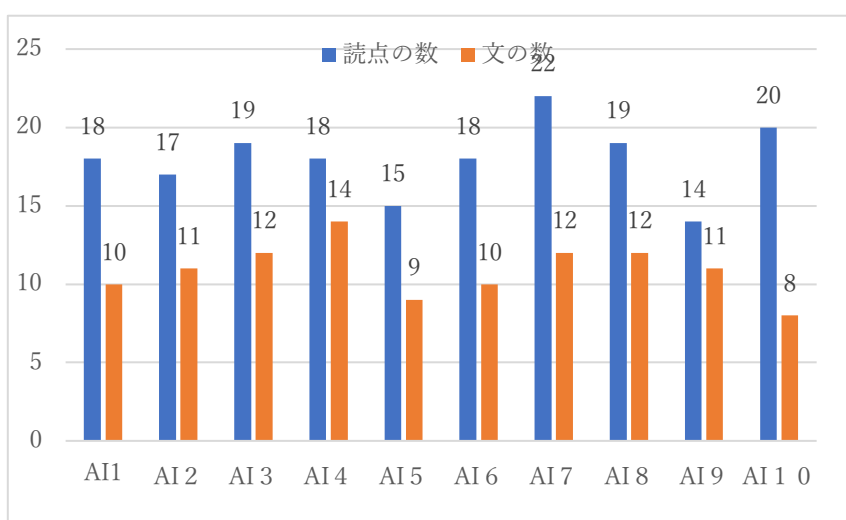
AI 8 : Claude②

AI 9 : ChatGPT(GPT-3.5)①

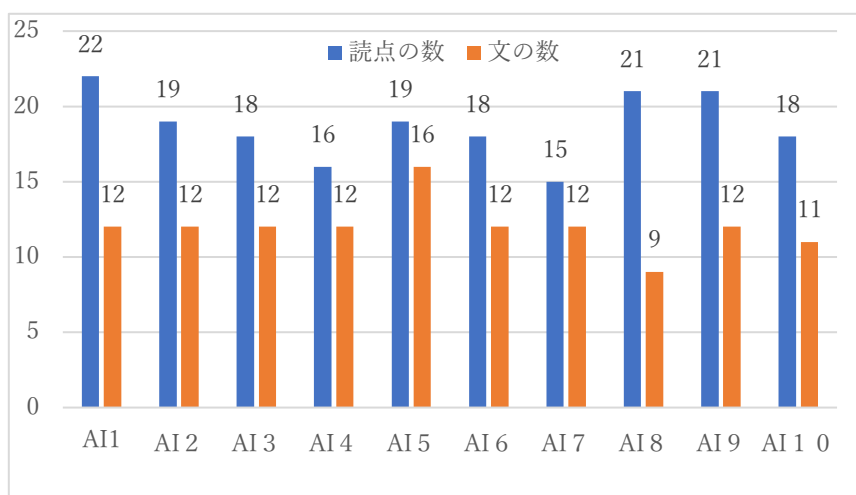
AI 10 : ChatGPT(GPT-3.5)②

調査項目①～⑫について、それぞれの項目ごとに結果を示す。

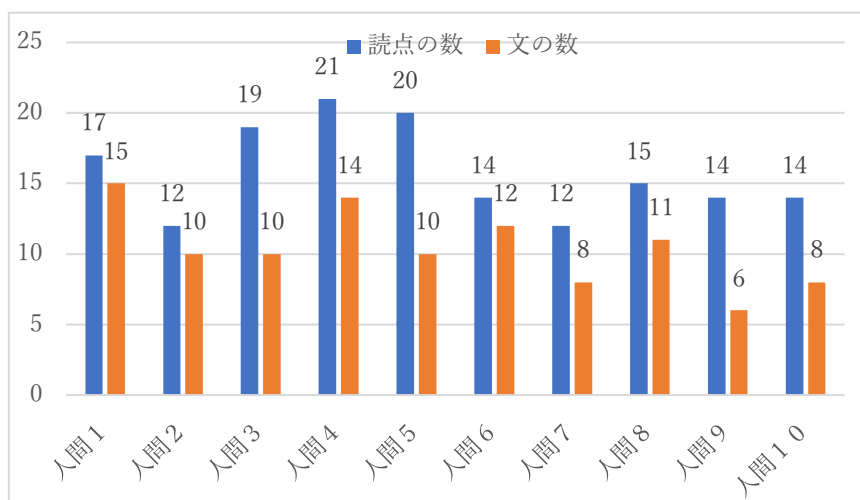
調査項目①読点の使用



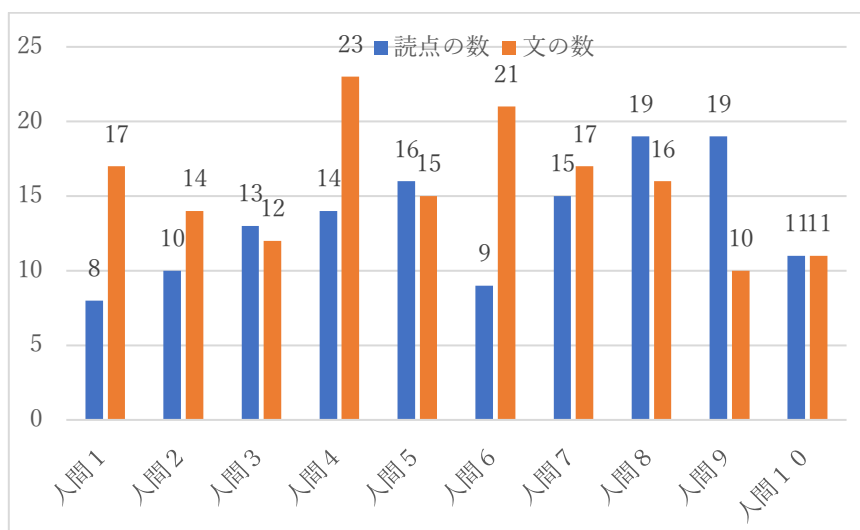
(図 10) AI : 【少子高齢化文】



(図 11) AI : 【思い出文】



(図 12) 人間：【少年高齢化文】



(図 13) 人間：【思い出文】

調査項目①では、AI生成文と人間執筆文の読点の使用の違いについて調査を行った。

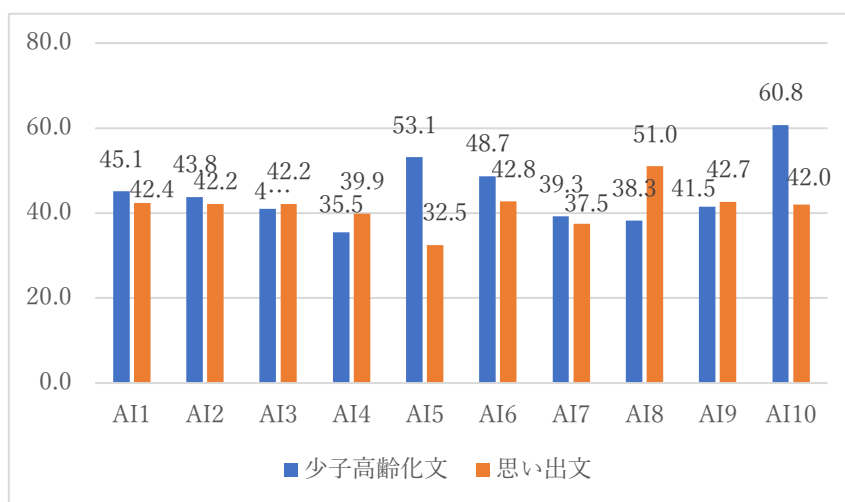
【少年高齢化文】について、AI生成文ではほとんどの文章が15~20回の間であり、大きなばらつきは見られない。また、文の数と読点の数との間の影響関係も認められない。人間執筆文でもおおむねAI生成文と同じような数値を示すが、AI生成文が15~20で散らばっていたのに対し、人間執筆文では15に近い数値が多くなっている。平均しても人間執筆文の方が読点の数は少ないが、大きな差であるとは言えない。

一方の【思い出文】では、両者が大きく異なる結果となった。AI生成文では、【少年高齢化文】と同様の傾向を示し、読点の数、文章の数ともに目に付く変化はなかった。しかしながら、人間執筆文では【少年高齢化文】と比べて人間1~人間10の全員の文章の数が増加しており、それによって人間7・人間8・人間9以外の読点の使用が大幅に減少し

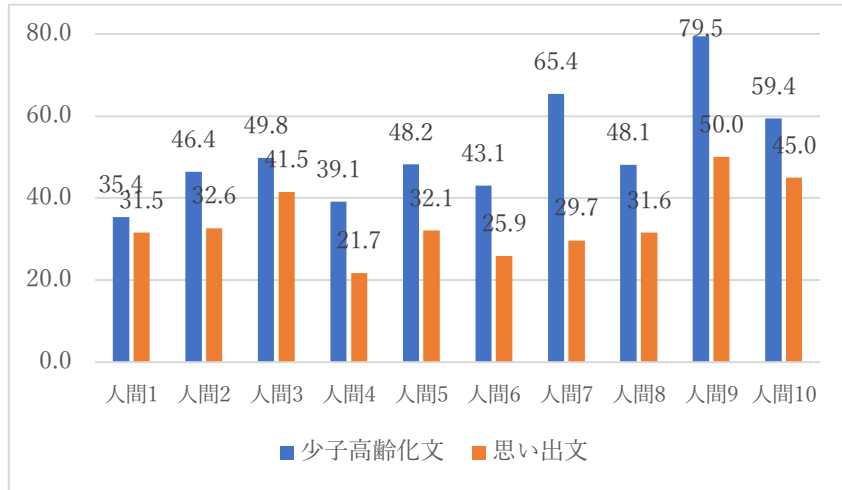
ている。これは、文章の数が増え、一文の長さが短くなったことで、読点を打つ必要がない箇所が多くなったためであるということが考えられる。人間7・人間8・人間9で読点の使用が増えた原因としては、人間7では会話文の使用や副詞の使用の多さ、人間8・人間9では旅先での様子を順に語っていくという文章の描写的な性格によるものであると考えられる。

調査項目①で分かったことは、全体的にAI生成文の方が読点が多いこと、【少子高齢化文】と【思い出文】の間に差異が見られないこと、各文章によるばらつきが小さいということである。これはAIがどのような文体の文章であっても、読点の使用と文章数の面から見ると、画一的に生成しているということを示している。予備調査（結果2）では、AI生成文における読点の使用が多いとの回答があったが、読点は文章数や使用語彙に大きく影響されるものであるので一概にそうとは言えないものの、今回平均してAI生成文の方が読点が多いという結果になったため、人間が通常打たない箇所に点を打っていることが違和感に繋がったとも考えることができるだろう。

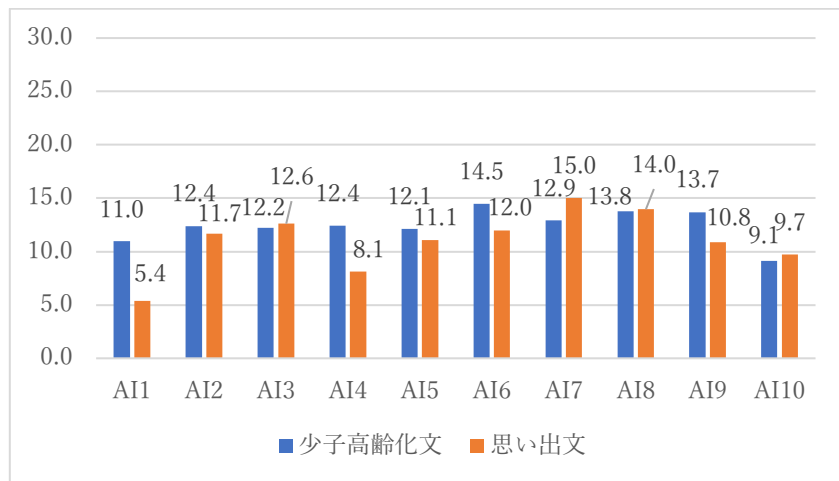
調査項目②一文の長さとその標準偏差



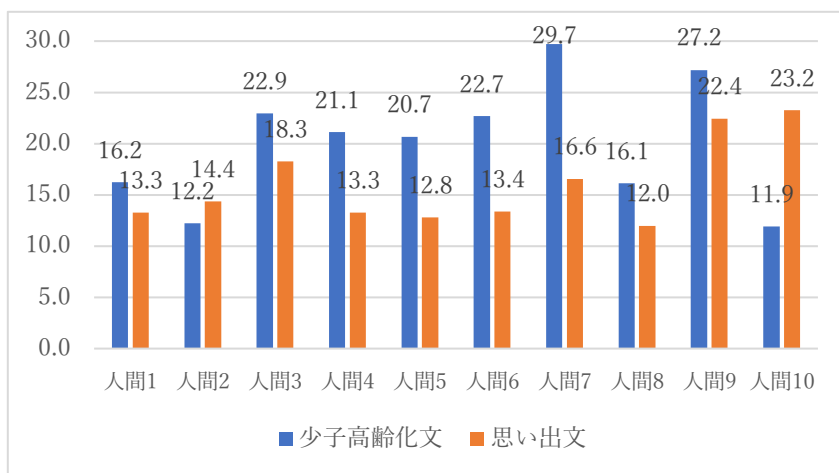
(図 14) AI：一文の長さの平均（小数第一位まで）



(図 15) 人間：一文の長さの平均（小数第一位まで）



(図 16) AI：一文の長さの標準偏差（小数第一位まで）



(図 17) 人間：一文の長さの標準偏差（小数第一位まで）

調査項目②では、一文あたりの長さの平均と標準偏差の調査を行った。

一文の長さの平均値では、AI3・AI4・AI8を除いた全ての文章で【少子高齢化文】のほうが【思い出文】よりも一文の長さが大きくなっている。特に人間執筆文においてはそれが顕著であり、【少子高齢化文】と【思い出文】の間の差異も大きい。これは調査項目①の文の数に大きく関係していると考えられる。今回の本調査では字数の制限を行ったため、文数が多ければその分一文あたりの長さは短くなる。つまり、【思い出文】の人間執筆文における一文の長さが短くなっているのは、人間執筆文全てが【少子高齢化文】から文数が増えていることが原因であるということである。そのようにして考えると、【少子高齢化文】の人間執筆文において特に数値の大きい人間7・人間9・人間10についても、文数相応であると捉えることができ、平均値だけで見れば、AI生成文も人間執筆文も文章数に応じて増減しているため、大きな差はないように思える。

しかし、標準偏差ではAI生成文と人間執筆文で大きな差が出ている。標準偏差とは、データの散らばりを表す数値であり、大きければ散らばりが大きく、小さければ散らばりが小さいということを示す。AI生成文の一文の長さの標準偏差は【少子高齢化文】ではAI10を除く全ての文章が10～15の間に収まっている。【思い出文】においても多少のばらつきはあるものの、全て5～15となっている。全体的に見ると、【少子高齢化文】の方が標準偏差が大きい傾向にあるが、その差は大きいもので偏差6であり、また、【少子高齢化文】でも【思い出文】でも全て偏差15以下であるので、一文の長さの散らばりはともに少ないと言える。それに対し人間執筆文では、全体的にAI生成文よりも偏差の数値が大きくなっている。特に【少子高齢化文】ではそれが顕著であり、ほとんどの文章で標準偏差15以上の数値を示している。AI生成文が全て15以下であることを考えると、人間執筆文では一文の長さの散らばりが非常に大きくなっていることが分かる。【思い出文】では【少子高齢化文】よりも大きな違いはないが、4つの文章が標準偏差15以上であるので人間執筆文の方が散らばりが大きいということには変わらないだろう。これは、Heather Desaireら（2023）の調査結果と一致しており、人間の方が文章の表現が多様であるということを示している。

調査項目②からは、AI生成文では一文あたりの長さが画一的になる傾向があり、人間執筆文と比べると標準偏差が非常に小さいということが分かった。

調査項目③一文の長さの上位10%と下位10%

【少子高齢化文】及び【思い出文】の全ての一文の長さを集計し、上位10%と下位10%を算出した。1つの文章につき上位10%と下位10%の文がそれぞれいくつ含まれるのかを示したものが以下の表である。

(表2) AI：一文の長さの長短

	【少子高齢化文】 上位10%	【少子高齢化文】 下位10%	【思い出文】 上位10%	【思い出文】 下位10%

AI 1				
AI 2	2		1	
AI 3	1			1
AI 4		1		
AI 5	2			1
AI 6	1		1	
AI 7		1	1	2
AI 8			3	
AI 9			1	
AI 10	4			
合計	10	2	7	4

(表3) 人間：一文の長さの長短

	【少子高齢化文】 上位 10%	【少子高齢化文】 下位 10%	【思い出文】 上位 10%	【思い出文】 下位 10%
人間 1	1	2	1	3
人間 2	1		1	2
人間 3	2		1	2
人間 4	2	1		13
人間 5	3	1	1	3
人間 6	1	2	1	6
人間 7	4		1	4
人間 8	2			2
人間 9	3		2	
人間 10	5		2	1
合計	24	6	10	36

上の表は上位・下位全ての項目で人間執筆文の方が多いいことを示している。【少子高齢化文】では、特に上位 10%が多くなっており、そのうちの三分の二以上が人間執筆文である。また、人間執筆文では人間 1～10 の全員が 1 つ以上は上位 10%の文字数が多い文を含んでいることがわかる。下位 10%についても、数は多くないが三分の二以上が人間執筆文であり、【少子高齢化文】の上位・下位合わせて 40 文のうちの 28 文が人間執筆文となっている。文の数の分母を考えても、【少子高齢化文】では AI 生成文が 107 文、人間執筆

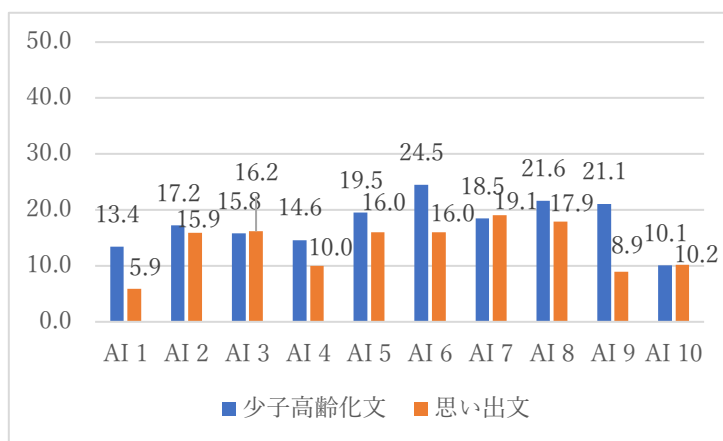
文が 104 文と大きな差はないので、【少子高齢化文】においては、上位・下位 10%の文章は人間執筆文の方が多いと言える。

【思い出文】では、全体的に下位 10%が多くなっており、【少子高齢化文】とは逆の傾向を示している。下位 10%の 40 文のうちの 36 文は人間執筆文であることから、下位の文章のほとんどが人間執筆文であることがわかる。上位 10%については 7 文と 10 文で大きな差はないが、人間執筆文の方が多くなっている。しかし、総文章数を考慮に入れると、AI 生成文が 119 文、人間執筆文が 155 文と、人間執筆文の方が多いため、上位 10%の差についてはないものとして考えるのが妥当だろう。下位についても文数が多い人間 4・人間 6が多くなっていることから、文の数が増えるとその分下位 10%の文の割合も増えると考えられるが、それを抜きにしてもやはり人間執筆文の方が数が相対的に多いため、AI 生成文と人間執筆文との間に明確な差が生じていると言える。

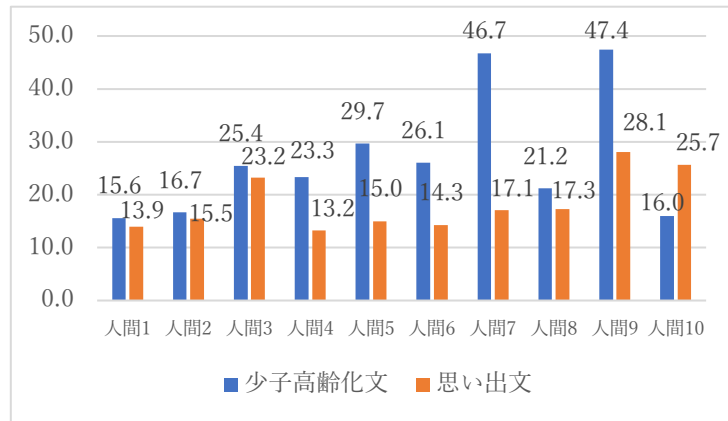
全体的に見ると、AI 生成文では、AI 1・AI 8・AI 10 のようにひとつの文章のなかに上位・下位 10%がどちらも含まれていないものがあるのに対して、人間執筆文では【少子高齢化文】においても【思い出文】においても、上位・下位 10%のどちらかは文章に含まれていることがわかる。このことから、人間執筆文では一文の長さが極端に長い・もしくは短い文を入れて文章に多様性を持たせていることがわかる。このことは、調査項目②の標準偏差と同様の結果を示しているといえる。

調査項目③からは、AI 生成文では上位 10%下位 10%に入らない平均的な長さの文章が多く、人間執筆文では極端に長い、もしくは短い文が文章に含まれやすいということが分かった。この結果も、Heather Desaire ら (2023) の調査結果と一致している。

調査項目④連続した文の長さの違い



(図 18) AI : 連続した文の長さの違い (小数第一位まで)



(図 19) 人間：連続した文の長さの違い（小数第一位まで）

調査項目④では連続した文の長さの違いについて調査を行った。連続した文の長さの違いとは、例えば一文の長さが 10 字の文の後に 30 字の文が来る場合、その差は 20 になるということである。これは文章の表現の多様性を示す指標となる。なお、上の図で示されている数値は平均値である。

結果を見ると、ほとんどの文章で【思い出文】よりも【少年高齢化文】の方が長さの違いが大きくなっている。【少年高齢化文】では、AI 生成文が全て 25 以下であるのに対し、人間執筆文では 25 以上の文章が 5 つある。特に人間 7・人間 9 は 45 以上と目立って数値が大きくなっているが、AI 生成文ではそのような大きなばらつきは見られない。また、【思い出文】においては、AI 生成文と人間執筆文との間に大きな差はないが、AI 生成文では 10 以下の文章がいくつかあるという点では AI 生成文の方が数値が小さいと言え、それは平均値を算出しても同様である。

調査項目④では、全体的に人間執筆文の方が連続した文の長さの違いが大きく、それぞれのばらつきも大きいということが分かった、連続した文の長さの違いについても Heather Desaire ら（2023）の調査と同様の結果となり、人間の方が文レベルでの多様性が豊かであるということが示された。

調査項目⑤段落の長さ（文の数と字数）

段落ごとの文の数と字数を集計した。Heather Desaire ら（2023）の研究では人間執筆文の方が、文の数・字数ともに多い傾向があることが示された。本論文では 500 字程度という少ない文字数指定であったため、それぞれの段落の分け方の特徴が反映された正確なデータであるとは言えない点には留意しなければならない。下の表は一段落あたりの文の数・字数の平均値である。なお、表における斜線箇所は段落を分けていない文章であり、スペースの関係で【少年高齢化文】を (1)、【思い出文】を (2) としている。

(表4) AI：文の数・字数の平均（小数第二位まで）

	AI1	AI 2	AI 3	AI 4	AI 5	AI 6	AI 7	AI 8	AI 9	AI 1 0
文の数(1)	3.33	3.67	4.00	2.80	2.25	2.50	2.40	2.40	2.75	2.67
文の数(2)	3.00	3.00	2.40	2.00	4.00	3.00	2.40	1.80	4.00	3.67
字数(1)	150.33	160.67	164.00	99.40	119.50	121.75	94.20	91.80	114.25	162.00
字数(2)	127.25	126.50	101.20	79.83	130.00	128.25	90.00	91.80	170.67	154.00

(表5) 人間：文の数・字数の平均（小数第二位まで）

	人間 1	人間 2	人間 3	人間 4	人間 5	人間 6	人間 7	人間 8	人間 9	人間 10
文の数(1)	5.00	2.50	2.50	4.67	3.33	4.00	4.00	3.67	3.00	2.67
文の数(2)		2.80	6.00		3.75	10.50	8.50	4.00	3.33	2.75
字数(1)	177.00	116.00	124.50	182.33	160.67	172.33	261.50	176.33	238.50	158.33
字数(2)		91.40	249.00		120.50	272.00	252.50	126.25	166.67	123.75

上の表から、【少子高齢化文】における文の数は、AI生成文においても人間執筆文においてもおおむね2~4文の間に収まっているが、人間執筆文では、人間1及び人間4で4文を上回っていることがわかる。これは人間執筆文の文の数のばらつきが大きいことを示す。【思い出文】についても同様で、AI生成文では2~4文の間に収まっているのに対し、人間執筆文では4文以上の文章がいくつかあるため、文の数が多いものと少ないものの差が大きくなっている。ばらつきが大きいため、中央値・平均値ともに人間執筆文の方が多くなるが、顕著に多いものを外れ値として捉えると両者の間に大きな差異は見出せない。

字数では、AI生成文が【少子高齢化文】・【思い出文】ともにほとんどが90~160字であるのに対し、人間執筆文は200字を越えるものがあるなど、文の数同様ばらつきが非常に大きくなっている。また、中央値・平均値いずれも人間執筆文の方が大きくなっていることから、一段落あたりの字数も人間執筆文の方が多くなる。しかし文の数とは異なり、外れ値として扱うには170字を越える文章が多すぎるので、字数に関しては人間執筆文の方が多くなる傾向にあるといえる。

また、以下では一段落当たりの文の数・字数の標準偏差を算出している。文章ごとではなく、段落ごとの文の数・字数のばらつきを見ることができる。なお、先に述べたが、標準偏差ではばらつきが大きいほど数値が大きくなり、ばらつきが小さいほど数値も小さくなる。

(表6) AI：文の数・字数の標準偏差（小数第二位まで）

	AI1	AI 2	AI 3	AI 4	AI 5	AI 6	AI 7	AI 8	AI 9	AI 1 0
文の数(1)	1.25	0.47	0.82	0.75	0.43	1.12	0.49	0.49	0.43	0.47
文の数(2)	0	0.71	0.80	0.58	0.71	0.71	0.80	0.75	0.82	0.47

字数(1)	46.13	26.79	34.29	32.31	23.09	42.63	19.36	12.56	23.12	24.91
字数(2)	7.76	32.28	32.02	24.44	19.46	20.64	31.18	38.37	19.62	21.65

(表7) 人間：文の数・字数の標準偏差（小数第二位まで）

	人間1	人間2	人間3	人間4	人間5	人間6	人間7	人間8	人間9	人間10
文の数(1)	3.74	0.50	0.87	1.89	0.94	2.45	1.00	2.05	1.00	1.25
文の数(2)		1.33	1.00		1.30	5.50	5.50	1.87	0.47	1.48
字数(1)	114.13	14.90	17.85	96.13	43.05	120.68	44.50	91.60	82.50	65.44
字数(2)		35.68	32.00		41.23	119.00	118.50	54.31	24.72	95.58

上の表から、【少子高齢化文】・【思いつ文】いずれも、文の数・字数ともに人間執筆文の方が相対的に標準偏差が大きくなっていることがわかる。このことから、人間執筆文では、文章ごとの文の数・字数の平均値にばらつきがあることに加えて、各段落における文の数・字数にもばらつきがあることがわかる。

調査項目⑤から明らかになったことは、文の数においても字数においても、平均値・中央値ともに人間執筆文の方が数値が大きいことと、文章ごと、段落ごとのばらつきも人間執筆文の方が大きかったことである。なお、前者の結果については Heather Desaire ら（2023）の結果と一致しているが、先に述べた通り、本調査では字数制限を設けているため、正確な結果を得るにはサンプルテキストを変更したさらなる調査が必要である。

調査項目①～⑤では読点の使用と一文の長さについての定量的調査を行った。先に述べた結果を改めて以下に示す。

- ①人間執筆文に比べて AI 生成文では読点使用が多く、文章やジャンルごとのばらつきが小さい。
- ②AI 生成文では、一文あたりの長さのばらつきが非常に小さい。
（=Heather Desaire ら（2023）の調査結果と一致）
- ③AI 生成文では、一文が極端に長い、もしくは短い文が含まれにくい。
（=Heather Desaire ら（2023）の調査結果と一致）
- ④AI 生成文では、連続した文の長さの違いやばらつきが小さい。
（=Heather Desaire ら（2023）の調査結果と一致）
- ⑤一段落あたりの文の数・字数ともに人間執筆文の方が多い。
（=Heather Desaire ら（2023）の調査結果と一致）
- ⑥一段落あたりの文の数・字数のばらつきが人間執筆文の方が多い。

以上のことから、AI 生成文では、それぞれの調査項目におけるばらつきが人間執筆文に比べて小さく、画一的な文章になりやすいことがわかる。また、Heather Desaire ら（2023）によれば、調査項目②～④は文レベルの表現の多様性を示す指標であることか

ら、AI生成文は人間のよう一文の長さを変えて文章に強弱をつけたり、リズムをつくったりして多様性を持たせることができていると理解できる。

調査項目⑥固有名詞と造語の使用

本調査で収集した文章のなかには、一般的に使用される複合語以外の造語は確認できなかったため、固有名詞のみを集計した。なお、数詞や抽象名詞は固有名詞に含めていない。

(表 8) AI：固有名詞の出現回数

	AI 1	AI 2	AI 3	AI 4	AI 5	AI 6	AI 7	AI 8	AI 9	AI 10	合計
少子高齢化文	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	12
思い出文	0	0	11	7	1	1	6	5	5	5	41
合計	1	1	14	8	2	2	7	6	6	6	53

(表 9) 人間：固有名詞の出現回数

	人間 1	人間 2	人間 3	人間 4	人間 5	人間 6	人間 7	人間 8	人間 9	人間 10	合計
少子高齢化文	0	1	3	0	1	1	3	2	2	0	13
思い出文	7	1	12	5	6	5	3	5	7	14	65
合計	7	2	15	5	7	6	6	7	9	14	78

上の表から、【少子高齢化文】においては固有名詞の使用回数に差はないが、【思い出文】においては人間執筆文の出現がやや多くなっていることがわかる。特に AI 1・AI 2 では固有名詞が使用されていない点が目立つ。人間執筆文では人間 2・人間 7 を除くとすべての文章で 5 回以上の使用が確認できるため、両者の決定的な違いであるといえる。

固有名詞の内容としては、【少子高齢化文】における固有名詞のほとんどは「日本」であり、【思い出文】では旅先の地名であることから、全体的な傾向として、用いられる固有名詞には地名が多いということがわかる。よって、AI生成文において固有名詞の使用がない、もしくは極端に少ないものは、旅の思い出を綴る【思い出】において行先の地名をほぼ示していないということになるが、これが先に述べてきたような内容の抽象性に繋がっているのではないだろうか。人間執筆文でも固有名詞の使用が 1 回だけの文章があるが、1 回のみ使用された固有名詞が人間執筆文では「三重」であるのに対し、AI生成文では「瀬戸内」であることから考えても、AI生成文では旅の行先を明確に指定しない文章が 4 つほどあることがわかる。固有名詞を含むということはその分内容が具体的になるということであるため、固有名詞の使用が少なれば少ないほど文章に抽象性があるといえる。よって固有名詞の使用の観点のみから言えば、使用が極端に少ない AI生成文については内容が抽象的である傾向にあるということである。

調査項目⑥では、【思い出文】においては固有名詞の出現回数の合計が人間執筆文の方が多く、極端に固有名詞の使用回数が少ない文章も AI 生成文に比べて少ないということがわかった。

調査項目⑦接続詞の使用

(表 10) AI : 【少子高齢化文】

	AI 1	AI 2	AI 3	AI 4	AI 5	AI 6	AI 7	AI 8	AI 9	AI 10	合計
あるいは											
一方			1	1							2
しかし						2	1				3
しかも											
そして											
ただ											
ただし											
また	2	1	1	1		1	1	1		1	9
合計	2	1	2	2		3	2	1		1	14

(表) AI : 【思い出文】

	AI 1	AI 2	AI 3	AI 4	AI 5	AI 6	AI 7	AI 8	AI 9	AI 10	合計
あるいは											
一方											
しかし											
しかも											
そして			1	1	1						3
ただ											
ただし											
また						1					1
合計			1	1	1	1					4

(表 11) 人間 : 【少子高齢化文】

	人間 1	人間 2	人間 3	人間 4	人間 5	人間 6	人間 7	人間 8	人間 9	人間 10	合計
あるいは				1							1
一方											
しかし		1		1			1				3

しかも											
そして	3			1							4
ただ		1			1						2
ただし			1								1
また		1						1	1	1	4
合計	3	3	1	3	1		1	1	1	1	15

(表 12) 人間：【思い出文】

	人間1	人間2	人間3	人間4	人間5	人間6	人間7	人間8	人間9	人間10	合計
あるいは											
一方											
しかし		1	1			1					3
しかも										1	1
そして				1							1
ただ		1					1				2
ただし											
また		1	1		1			1	1		5
合計		3	2	1	1	1	1	1	1	1	12

調査項目⑦では接続詞の使用数を確認した。

【少子高齢化文】では、AI生成文で14回、人間執筆文で15回と使用数には大きな差がなかったが、AI生成文が「一方」「しかし」「また」のみを使用しているのに対し、人間執筆文ではその他にも「あるいは」「そして」「ただ」などの接続詞も使用していることがわかった。また、AI生成文では「また」の使用が目立つが、人間執筆文では「また」が特別多いというわけではなく、比較的均等に散らばっていることから、数で見ても散らばりで見ても人間執筆文の方が多様な接続詞を用いていることが示されている。

【思い出文】では、接続詞の出現回数がAI生成文と人間執筆文とで大きく異なっている。AI生成文が【少子高齢化文】から数を大幅に減らしているのに対し、人間執筆文では3回の減少に留まっている。このことから、AI生成文は意見文のような論理的な内容かつある程度文章の型が決まっている文章では、接続詞を用いて分かりやすく構造的な形にする一方で、作文のような感情や出来事を記述する文章では接続詞をあまり用いず、副詞や名詞で文章を繋ぐことがわかった。このような傾向は、AIが各ジャンルにふさわしい文章構造や表現方法を選択していることを示しており、むしろ人間の方が文章ジャンルに適切に対応できていないといえるのではないだろうか。一方で、【思い出文】においてAI生成文が「そして」「また」のみを使用しているのに対し、人間執筆文ではその他の接続詞も用

いていることから、表現の多様性という観点では【少子高齢化文】と同様に人間執筆文の方が豊かであるといえる。

予備調査（結果2）では「接続詞の使用が少ないのがむしろ人間らしい」という回答があったが、今回の結果ではむしろ人間の方が接続詞を多く使用していることが示された。また、AIらしい点として「～にしては〇〇すぎる」という回答もあったが、接続詞の使用のみについて言えば、AIの方が感情や様子を抒情的に描写するという作文の性質に合った表現を選ぶことができている。

調査項目⑦からわかったことは、【少子高齢化文】では出現回数に大差はないが、【思い出文】では人間執筆文の方が接続詞が使われやすいこと、【少子高齢化文】【思い出文】ともに人間執筆文の方が接続詞のバリエーションが豊かであるということである。

調査項目⑧文末の文法的特徴

ここでは複数ある文末表現のパターンを抽出して集計を行った。なお、「動詞の原形」とは使用数の多かった「ある」「いる」「なる」「する」「考える」「思う」以外の動詞の原形で締められている文章の数である。また、過去形についても現在形と同様の項目に割り振っている。

(表 13) AI：【少子高齢化文】文末表現

	AI1	AI2	AI3	AI4	AI5	AI6	AI7	AI8	AI9	AI10	合計
である			3	2	3	6	3	3	3	2	25
だ	2	3		4	3	2	1	2			17
ている	2	2	7	3	1		1	3	1	2	22
だろう									1		1
ある	2	1		2	1		1	2	2		11
いる											0
なる		2				1	2				5
する							1			1	2
考える	1	1			1					1	4
思う											0
動詞の原形	2							1			3
ねばならない											0
ない		2	1			1	1		2		7
たい											0
れる・られる			1	1			1	1		1	5
か											0
できる	1						1		1		3

名詞											0
形容詞									1		1
その他										1	1
合計	10	11	12	12	9	10	12	12	11	8	107

(表 14) AI :【思い出文】文末表現

	AI 1	AI 2	AI 3	AI 4	AI 5	AI 6	AI 7	AI 8	AI 9	AI 10	合計
である											0
だ	3	3	3	1	3	4	1	1		1	20
ている	2	1	2	3	1	3	5	4	5	3	29
だろう											0
ある								1			1
いる											0
なる	2	1									3
する		1					1				2
考える											0
思う		1		1	2	1					5
動詞の原形	2	2	3	2	6		2	2	5	5	29
ねばならない											0
ない					1	2					3
たい											0
れる・られる	2	2		3			1				8
か							1				1
できる											0
名詞		1	2	1	2						6
形容詞							1				1
その他	1		1	1	1	2		1	2	2	11
合計	12	12	11	12	16	12	12	9	12	11	119

(表 15) 人間 :【少子高齢化文】文末表現

	人間 1	人間 2	人間 3	人間 4	人間 5	人間 6	人間 7	人間 8	人間 9	人間 10	合計
である	5			6		2	3				16
だ			2			3		3			8

ている	2			2	2	1		1	3		11
だろう		1	1	1				1			4
ある	1		1		1			1		1	5
いる					1						1
なる	1			2						1	4
する		1	1					1			3
考える	1							2		3	6
思う		5	1		1				3		10
動詞の原形	1	1		2		1				1	6
ねばならない					1	1					2
ない	2					1	1				4
たい	1				2	1		1			5
れる・られる	1		1	1	1			1			5
か		2				2	3			1	8
できる			1								1
名詞			2								2
形容詞					1						1
その他							1			1	2
合計	15	10	10	14	10	12	8	11	6	8	104

(表 16) 人間：【思い出文】文末表現

	人間 1	人間 2	人間 3	人間 4	人間 5	人間 6	人間 7	人間 8	人間 9	人間 10	合計
である	2					1	1			1	5
だ	3	2	3	3		4	2	6	4	3	30
ている	3		1		2	1	2				9
だろう											0
ある	2		1			1					4
いる			2					1	1		4
なる	1			1			1				3
する		3	1	1	3	1	1	1	2	2	15
考える											0
思う		1	1							1	3
動詞の原形	4	4	2	4	2	3	3	2		2	26
ねばならない											0

ない	2					2	1	1			6
たい											0
れる・られる				1					1		2
か						2	1				3
できる			1			1		2		1	5
名詞				11	5	3	1	1			21
形容詞		4		1	1	1			1		8
その他				1	2	1	3	2	1	1	11
	17	14	12	23	15	21	16	16	10	11	155

上の表から、【少子高齢化文】では、AI生成文における出現回数が多い文末表現がある程度偏っていることが分かる。特に多いのは「である」「だ」「ている」「ある」「ない」であり、これらが全体の75%以上を占め、その他の文末表現は出現回数5以下である。一方で人間執筆文では、数の多い文末表現はAI生成文とおおむね同じであるが、AI生成文に比べて偏りが少なく、その他の文末表現も多く用いられている。特に「たい」「思う」「か」はAI生成文では出現回数0であるのに対し、人間執筆文では多く用いられている点は注目すべきである。これらは主に筆者の意見を表す表現であり、それは「考える」等も同様であるが、「考える」に比べてよりくだけた表現になっている。意見文という比較のかたい文体ではくだけた表現は適切とはいえないため、AI生成文では使用されにくいと考えられるが、実際に人間執筆文では数多く用いられていることから、この程度のくだけた表現は意見文であっても一般的に使用されていると捉えてよいと思われる。しかしながら、意見文としての体裁を保った表現であるといえるのは、「考える」を主に使用しているAI生成文の方であるのは間違いないだろう。また、上に述べた「たい」「思う」「か」が意見を述べる表現であるという性質が、生成されにくさにつながっているということも考えられる。文末表現のうち、意見・考えを表す表現は上に挙げたもののほかには「ねばならない」「だろう」があるがいずれもAI生成文での使用は少ない。意見文であるにも関わらず、「考える」以外の意見を述べる表現が少なく、個人の意見と言うより一般的な見解を述べる傾向があるのがAI生成文の特徴であるといえるだろう。

【思い出文】では、AI生成文と人間執筆文の散らばりの差は小さくなっているが、出現回数の多い文末表現が一部異なっている。AI生成文では、「だ」「ている」「動詞の原形」「れる・られる」が多くなっているが、そのうち「ている」「れる・られる」は人間執筆文では出現が多くない。特に「ている」はAI生成文では「動詞の原形」と並んで最も多い文末表現となっているが、人間執筆文では155回のうちの9回に留まっている。これは二者の明確な差であるといえる。AI生成文で「ている」が多くなっていることの原因として、「ている」が意味を断定することを避けた表現であることが考えられる。「ている」は

継続や状態を表す描写的な表現であり、「だ」や「動詞の原形」に比べると婉曲的であるといえる。上に述べたようにAI生成文では意見よりも一般的な見解を述べる傾向があるように思われるため、断定的な表現を避けるために「ている」が多用されていると考えられる。一方人間執筆文では、AI生成文に比べて「する」「名詞」「形容詞」が多くなっている。「する」は全て「〇〇した」の形で用いられているが、これは「全員でボードゲームをした。」「沖縄の食を堪能した。」のように、旅先での行動を列挙するように述べられている。具体的なエピソードを描写する際に使用されることが多いため、「する」が多くなっていると考えられる。「形容詞」についても同様で、「～が美味しかった」のように具体的な様子を述べようとする姿勢が表れていると同時に、助動詞などが伴わない分、断定的な表現となるため、人間執筆文での使用が多くなっていると考えられる。「名詞」については、人間4における使用が顕著なので純粋な比較はできないが、出現回数としてはAI生成文よりも著しく多いため、人間執筆文においては体言止めが現れやすいといえるだろう。予備調査（結果2）において、体言止めの使用が人間らしさの要因として挙げられていたが、現れやすさの点でいえばそれは妥当な認識であると思われる。また、同じく予備調査（結果2）では、「AI生成文の文末が重複している」という回答があったが、【少子高齢化文】人間9を見ると、文末が「思う」「ている」の二種類に偏っていることから、必ずしもAIであるから文末が重なりやすいということはないとみられる。

調査項目⑧からは、AI生成文では出現回数が多い文末表現が偏っているのに対し、人間執筆文ではある程度ばらつきがあるということがわかった。また、【少子高齢化文】においてはAI生成文の特徴として、意見文でありながら一般的な事実を述べる抽象性があること、人間執筆文よりもふさわしい文末表現を選択していることが挙げられ、【思い出文】では断定を避けた表現、描写的な表現を多用していることがわかった。

調査項目⑨感情表現・比喩表現の使用

感情表現について、ここでは広く捉え、心情だけでなく意見や考えを表明する表現も感情表現として扱うこととする。具体的には、「だろう」「～ではないか」といった推定は含まず、「嬉しい」「楽しい」「感じる」「思う」「考える」など直接感情や意見を言い表すもののみを集計している。また、【思い出文】においては上記の直接的な表現以外にも、「心が温かくなる」「感動がこみ上げる」といった表現も感情表現として扱っている。

比喩表現については、「胸を躍らせる」「頭に浮かぶ」「甘い思い出」などの比喩は数が多く、判断が主観的になる可能性があるため、「まるで」「ようだ」等を含む直喩と、慣用的な表現ではなく明らかに比喩として表現している隠喩（「葉擦れの音は（中略）自然の音楽だ」など）のみを集計している。

（表 17）AI：【少子高齢化文】感情・比喩表現

	AI 1	AI 2	AI 3	AI 4	AI 5	AI 6	AI 7	AI 8	AI 9	AI 10	合計
--	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	----

感情表現	1	1			1					1	3
比喩表現											0

(表 18) AI：【思い出文】感情・比喩表現

	AI 1	AI 2	AI 3	AI 4	AI 5	AI 6	AI 7	AI 8	AI 9	AI 10	合計
感情表現	5	6	3	4	3	3	3	2	2	2	33
比喩表現	1	2	5	2	1	2	4		1	1	19

(表 19) 人間：【少子高齢化文】感情・比喩表現

	人間 1	人間 2	人間 3	人間 4	人間 5	人間 6	人間 7	人間 8	人間 9	人間 10	合計
感情表現	2	6	1		4	1		4	3		21
比喩表現	1			1							2

(表 20) 人間：【思い出文】感情・比喩表現

	人間 1	人間 2	人間 3	人間 4	人間 5	人間 6	人間 7	人間 8	人間 9	人間 10	合計
感情表現	1	7	4	2	2	2	2	2	1	3	26
比喩表現					1			1	2		4

AI 生成文について、【少子高齢化文】では感情・比喩表現がほとんど使用されていないのに対し、【思い出文】では感情・比喩表現がどちらも飛躍的に使用されるようになっていく。これは論理的な構成かつかたい文体で記述される意見文と、個人の感想や心情を抒情的に書き表す作文という文章ジャンルに非常に合致した結果となっている。人間執筆文では、AI 生成文と大きく異なり、【少子高齢化文】でも感情表現が多用されている。これはほとんどが「思う」「考える」であるが、調査項目⑧で述べたように意見文では個人の意見よりも一般的な事実を述べる傾向がある AI 生成文に対して、人間執筆文では積極的に個人の意見や感想、展望を述べるような傾向があるため、これらの表現が多くなっている。【思い出文】では、感情表現が【少子高齢化文】よりも満遍なく使用されるようになり、比喩表現の使用回数が若干増加している。AI 生成文と明確に異なっているのは、比喩表現の使用回数である。AI 生成文では 19 回出現しているが、人間執筆文ではわずか 4 回である。また、「まるで～のよう」といった典型的な比喩表現は AI 生成文における頻度の方が高くなっている。これは、AI 生成文では、比喩表現を多用して旅の様子を臨場感あふれる書きぶりでありありと描写しているのに対し、人間執筆文では見たまま、体験したままを素直に書き連ねているという表現態度の違いが現れている。調査結果⑧で、人間執筆文に

おける文末表現のうち「する」「形容詞」の出現回数が AI 生成文に比べて顕著に多かったのもそれが要因であると考えられる。

予備調査（結果 2）において、「人間らしさ」の要因として、感情・比喩表現の使用が挙げられたが、作文などの柔らかい文体ではむしろ AI 生成文の方が感情・比喩表現を多く使用していることが明らかになった。一方で、「AI らしさ」の要因として、わざとらしく大げさな感情表現が目立つという回答もあった。これは、AI 生成文における多様な感情・比喩表現がかえって過剰であるように感じられ、人間執筆文にはない不自然さにつながったと考えられる。

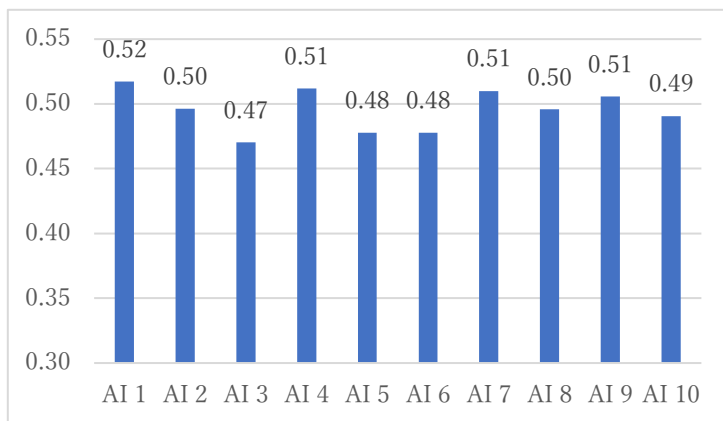
調査項目⑨から明らかになったことは、人間執筆文では【少子高齢化文】でも感情表現が多く用いられていること、【思い出文】では AI 生成文の比喩表現の使用回数が顕著に多いことである。

調査項目⑥～⑨では固有名詞・造語・接続詞・文末表現・感情表現・比喩表現の使用について調査を行った。これまで述べてきた調査結果を改めて以下に示す。

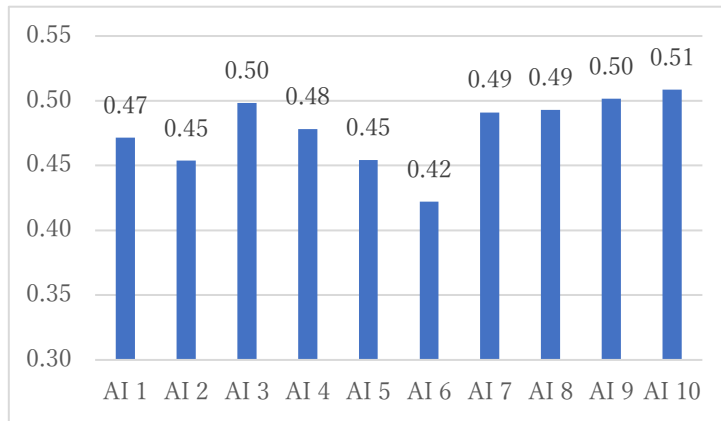
- ①【思い出】では AI 生成文より人間執筆文の方が固有名詞が多い。
- ②人間執筆文では【少子高齢化文】・【思い出文】のいずれにおいても接続詞が用いられやすく、使用される接続詞が多様である。
- ③AI 生成文では、【少子高齢化文】においては意見を述べる文末表現が少なく、【思い出文】においては断定を避ける表現・描写的な表現が用いられやすい。
- ④AI 生成文では使用回数の多い文末表現が偏っている。
- ⑤人間執筆文では【少子高齢化文】においても感情表現が多く用いられる。
- ⑥AI 生成文では【思い出文】における比喩表現の使用が顕著である。

調査項目⑩TTR（タイプ・トークン比）

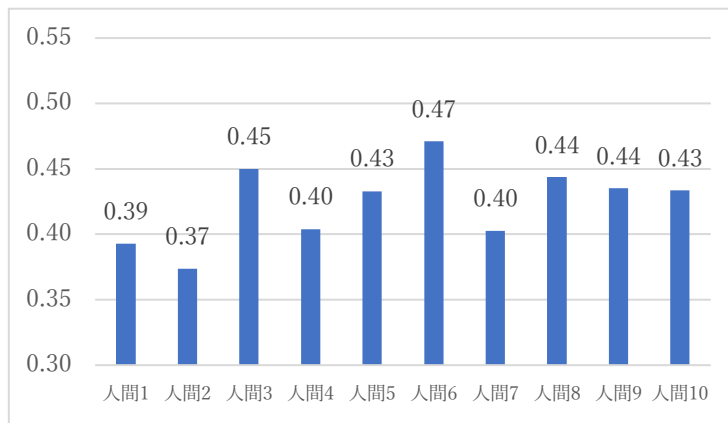
TTR は文字数に大きく依存するが、今回の調査の場合は 450~550 字という字数制限を設けているため、特別な処理等を行わずに TTR を算出している。以下のグラフは、差異を視覚的に分かりやすくするために最小値を 0.3 としている。



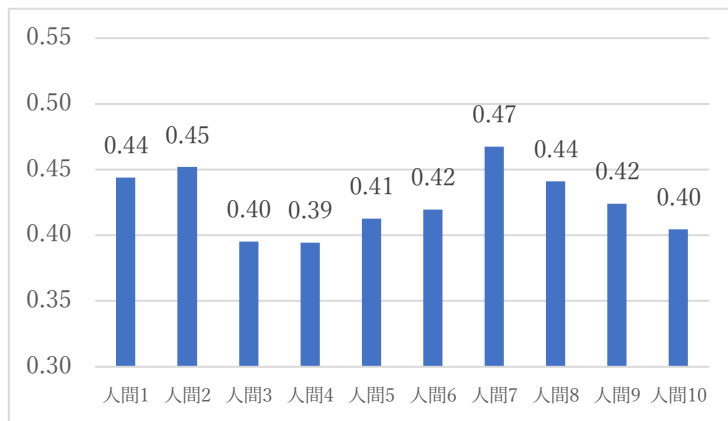
(図 20) AI：【少子高齢化文】（小数第二位まで）



(図 21) AI：【思い出文】(小数第二位まで)



(図 22) 人間：【少年高齢化文】(小数第二位まで)



(図 23) 人間：【思い出文】(小数第二位まで)

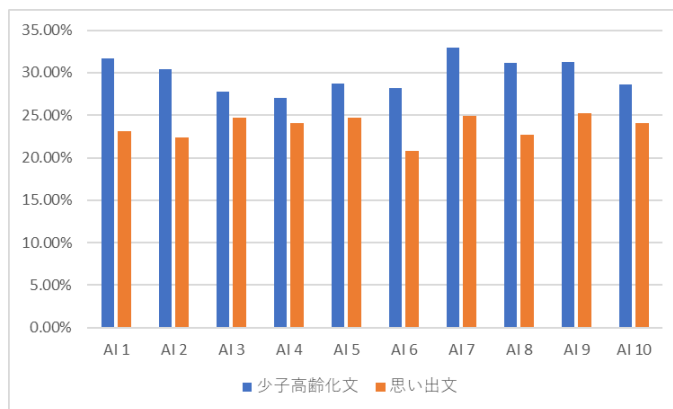
調査項目⑩では TTR の算出を行った。TTR は数値が大きいほど語彙が多様であることを示す。上の図からは、【少年高齢化文】【思い出文】ともに AI 生成文のほうが TTR が大きい傾向にあることが読み取れる。つまり、人間執筆文に比べて AI 生成文は使用語彙が豊富であるということである。これはデータの中央値をとっても平均値をとっても同様のことがいえる。次に AI 生成文と人間執筆文のそれぞれの傾向を見てみると、AI 生成文で

は、【思い出文】よりも【少子高齢化文】の方が TTR が大きくなっている。また、【少子高齢化文】では各データのばらつきも小さいため、AI 生成文全体として TTR が大きい傾向にある。ただ、相対的にはそのような結果となるが、【思い出文】においても TTR がおおむね 0.45～0.50 に収まっているため、TTR が顕著に小さいというわけでも、ばらつきが大きいというわけでもない。一方の人間執筆文では、AI 生成文の傾向とは異なり、中央値・平均値ともに【少子高齢化文】と【思い出文】の間に大きな差異は見られない。ばらつきに関してもどちらもおおむね同じ幅でばらつきが確認できるため、双方の間に有意な差は認められないといえる。全体的に、AI 生成文が 0.45～0.50 であるのに対し、人間執筆文は 0.40～0.45 であるので、AI 生成文の方が TTR が大きいというこ明白である。

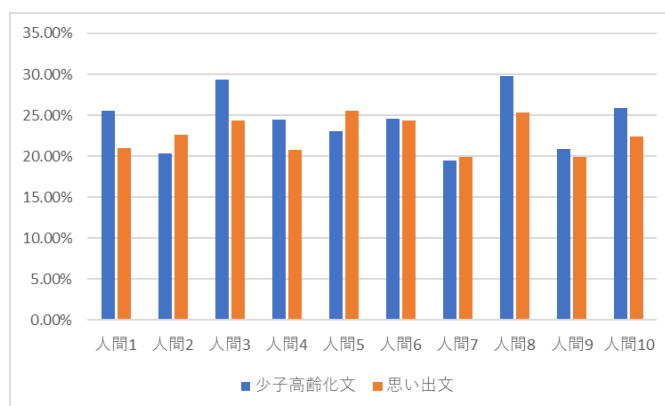
予備調査（結果 2）において、「人間らしい」と感じた点に「同じ内容を言葉を変えて繰り返す」というものがあったが、この回答は、人間は同じ言葉を繰り返し使わずに言葉を変えているというように捉えられるため、そのようにして考えると TTR は自ずと高くなるはずである。しかし結果として今回人間執筆文の方が TTR が低いという結果が出たため、回答者の認識とのずれが生じているということになる。

調査項目⑨では AI 生成文の方が TTR が高く、語彙が多様であるということがわかった。

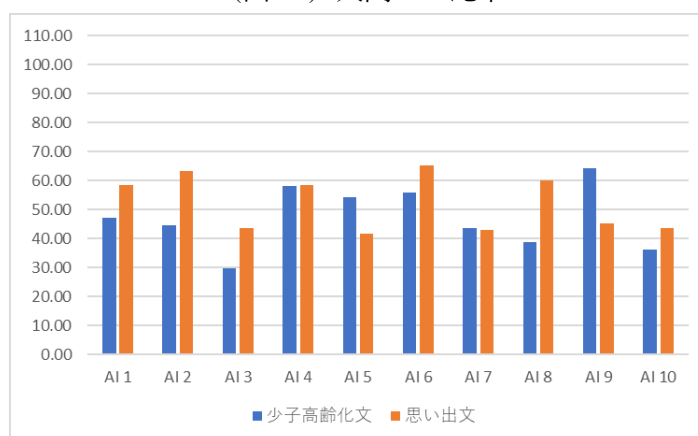
調査項目⑩語種構成比率（品詞構成比率：単位語水準）



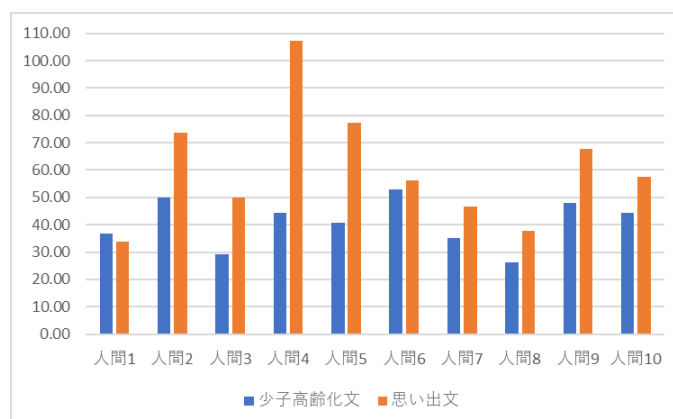
(図 24) AI : N 比率



(図 25) 人間 : N 比率



(図 26) AI : MVR



(図 27) 人間 : MVR

まず、N 比率を見ると、AI 生成文では【少年高齢化文】よりも【思い出文】の方が N 比率が低くなっている。これは、AI 1~AI 10 まで全ての文章で同様のことがいえる。これは【思い出文】では【少年高齢化文】に比べて名詞の使用回数が少なくなり、その分動詞や副詞等の使用が多くなっているということである。一般的に名詞が多いほどかたい文体であるとされているため、この比率の違いは意見文と作文というジャンルにそれぞれ合致

した結果であるといえる。人間執筆文では、AI生成文にみられたジャンルに依った違いが見られず、中には【思い出文】のN比率の方が高いものもある。このことから、人間執筆文では、【少子高齢化文】と【思い出文】で文体を大きく変えないという傾向があることが理解できる。また、AI生成文と人間執筆文では、【少子高齢化文】についてはAI生成文のN比率の方が高い傾向にあるが、【思い出文】では顕著な差が見出せない点も重要である。これはN比率が表現態度や文体をある程度規定するものであるという前提のもとでは、【少子高齢化文】では両者の文体・表現等が異なっているのに対し、【思い出文】では【少子高齢化文】に比べて両者の文体・表現等が似た構造をとっているということがいえるのではないだろうか。

次にMVRではAI生成文と人間執筆文との間に大きな違いが生じていることが確認できる。AI生成文では、おおむねMVRが40~60の間であるが、人間執筆文では40を下回る文章や、70を上回る文章が多く見られることから、これまで見てきた調査項目と同様にデータのばらつきが非常に大きくなっていることがわかる。また、【少子高齢化文】においてはMVRの上位4文章がAI生成文であるのに対し、【思い出文】では人間執筆文となっている点にも着目したい。それを述べる前に、前述の樺島・寿岳（1965）による表現態度の分類を行う。前掲であるが、N比率とMVRによって、以下のように表現態度を推定できる。

- ①名詞比率Nが大きく、MVRが小さい文章には要約的な文章が多い。
- ②Nが小さく、MVRが大きい文章にはありさま描写的な文章が多い。
- ③Nが小さく、MVRが小さい文章には動き描写的な文章が多い。

樺島・寿岳（1965）の研究では、大小の判定に具体的な数値が用いられているが、本調査においては相対的なN比率・MVRの大小を判断するため、N比率及びMVRについて、【少子高齢化文】・【思い出文】それぞれで中央値を算出し、中央値以下であればN比率・MVRが小さく、中央値より大きければN比率・MVRが大きいとした。以下、その結果を表に示す。なお、①は「要約」、②は「ありさま」、③は「動き」と示し、「—」は樺島・寿岳（1965）によって規定されなかった、N比率・MVRともに大きい文章を表す。

(表 21) AI:表現態度

	AI 1	AI 2	AI 3	AI 4	AI 5	AI 6	AI 7	AI 8	AI 9	AI 10
少子高齢化文	—	—	要約	ありさま	—	—	要約	要約	—	要約
思い出文	ありさま	ありさま	要約	—	要約	ありさま	要約	ありさま	要約	要約

(表 22) 人間：表現態度

	人間 1	人間 2	人間 3	人間 4	人間 5	人間 6	人間 7	人間 8	人間 9	人間 10
少子高齢化文	動き	ありさま	要約	動き	動き	ありさま	動き	要約	ありさま	動き
思い出文	動き	ありさま	要約	ありさま	—	要約	動き	要約	ありさま	ありさま

先に、【少子高齢化文】における MVR の上位 4 文章が AI 生成文、【思い出文】における 4 文章が人間執筆文となっていることを述べたが、これは表現態度にある程度偏りがあるためであると考えられる。【少子高齢化文】では MVR が高い表現態度が AI 生成文に偏っており、また、【思い出文】でも【少子高齢化文】ほど顕著ではないが、人間執筆文の方が MVR が高い表現態度の数が多くなっていることから、この傾向が上記のような偏りにつながったと思われる。

上の表を見ると、AI 生成文では【少子高齢化文】・【思い出文】ともに「要約的文章」と「ありさま描写」のみとなっているのに対し、人間執筆文では「要約的文章」「ありさま描写」「動き描写」がある程度均等に散らばっていることがわかる。

AI 生成文について、表現態度が「要約的文章」・「ありさま描写」のみで構成されている点については極めて重要な発見であるといえる。「動き描写」は動詞を中心として動作の流れを描写する表現態度であるが、それが 20 の文章のなかに 1 つも含まれていないということは非常に極端な結果であるためだ。この結果は、AI 生成文では動詞ではなく、名詞、もしくは形容詞類を中心に用いる表現態度であるということを示している。「要約的文章」及び「ありさま描写」は「動き描写」に比べて、動作ではなく様態を描写するような、情報伝達的な側面があると思われる。AI 生成文にこれらが多く見られるのは、読み手に端的で分かりやすく伝えることが重視された結果であるとも考えられるだろう。予備調査（結果 2）において、「説明的すぎる」点が「AIらしさ」を感じる特徴として挙げられていたが、この「説明的」というのは「要約的文章」「ありさま描写」という表現態度からそのように感じられるのではないかと推測できる。

一方の人間執筆文では、「要約的」「ありさま描写」「動き描写」の数がそれぞれほぼ均等であるため、さまざまな表現態度で述べられているといえる。これは、人間が書きたい内容や文量、文体によって、個人の判断で最もふさわしい表現態度を選択しているからであると考えられる。AI では与えられたプロンプトに対して、一定の条件のもと画一的に生成していると考えられるため、人間の選択的自由が表現態度に影響している可能性がある。もしくはこれまで述べてきた、人間執筆文に見られるばらつきが関連しているということも考えられる。AI 生成文に見られる傾向が特徴的であるのではなく、人間執筆文のばらつきが大きいと捉えることもできるかもしれない。どちらにせよ、実際に結果として AI 生成文と人間執筆文では全く異なる表現態度であったため、AI が文章を生成するにあたって生じる、人間が言葉を紡ぐ場合との差異が表現態度として表面化したと考えるのが妥当だろう。

また、人間執筆文では、AI 生成文と比べると【少子高齢化文】においても【思い出文】においても同様の表現態度をとっているケースが多くなっている。完全に一致しているものだけでも 10 人中 6 人で過半数を越えているが、さらに N 比率の大小で考えると人間 5・6 を除く全ての人間執筆文で【少子高齢化文】と【思い出文】の大小が等しくな

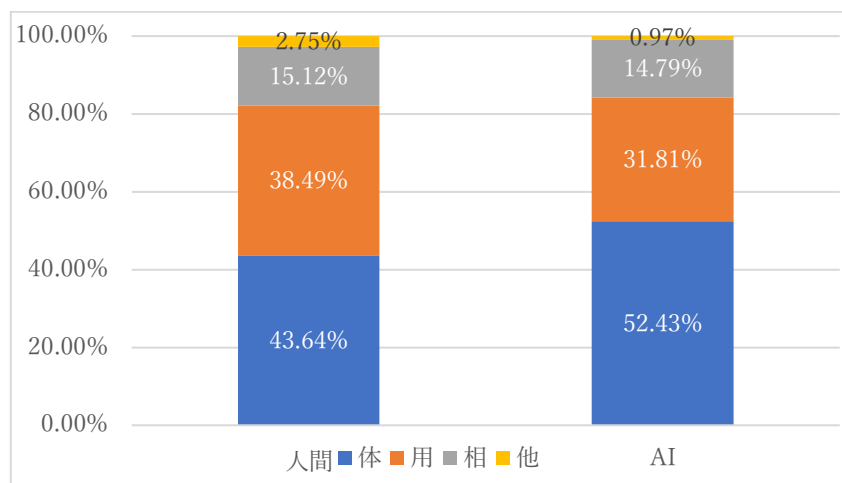
っている。このことから、人間執筆文では個人の文体がある程度確立しており、それによって表現態度が決まっていると考えることもできそうである。つまり、個々人に書き方や文体の癖があり、それが表現態度として表出しているということである。AI 生成文において、人間執筆文に見られるこのような特徴があまり現れていないのは、AI 生成文には文体がなく、その都度プロンプトによって生成内容やプロセスが変わるためであると考えられる。

調査項目⑪からわかったことは、人間執筆文では【少子高齢化文】【思い出文】との間に N 比率の差異が見られないこと、AI 生成文では「要約的文章」「ありさま描写」に表現態度が偏っていること、人間執筆文にはそれぞれの文体が確立している可能性があることとの 3 点である。

調査項目⑫語の意味

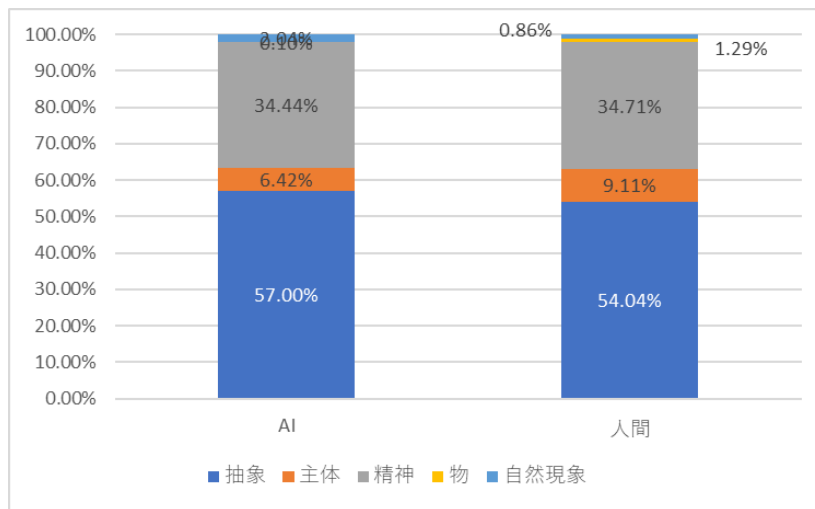
調査項目⑫では自立語を抽出し、出現語彙を『分類語彙表』における意味分類に応じて集計を行っている。

まずは、調査項目⑫の結果の前に。調査項目⑪の補強として、抽出した自立語の品詞分類を以下の図に示す。

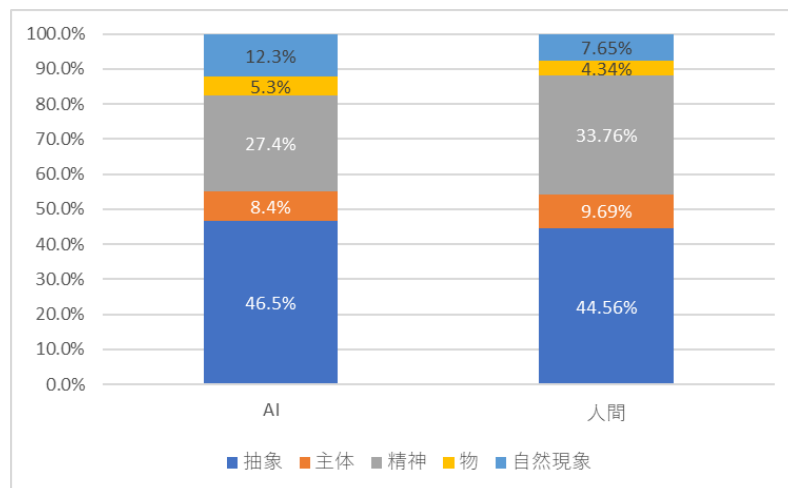


(図 28)『分類語彙表』における品詞分類

上の図は、【少子高齢化文】と【思い出文】を全て合算した際の『分類語彙表』における品詞別の割合である。これを見ると、「体の類」と「用の類」の比率がそれぞれ 10% ずつ異なっていることが読み取れる。人間執筆文では AI 生成文に比べて「体の類」の比率が低く、「用の類」の比率が高くなっている。これは調査項目⑪における N 比率の差異を補強するデータであるといえる。調査項目⑪でみられた、【少子高齢化文】における N 比率の差が、このような形で表れているといえる。また全体的に見れば、AI 生成文の方が相対的に「体の類」の比率が高いため、人間執筆文よりもかたい文体で生成される傾向があるといえる。



(図 29) 【少年高齢化文】『分類語彙表』



(図 30) 【思い出文】『分類語彙表』

上の図では、「抽象的關係」を「抽象」、「人間活動の主体」を「主体」、「人間活動—精神および行為」を「精神」、「生産物および用具」を「物」、「自然物および自然現象」を「自然現象」として表記している。

(図 29) (図 30) からは【少年高齢化文】・【思い出文】のいずれにおいても「抽象的關係」に分類される語の数に大きな差が見られないということがわかる。予備調査(結果 2)では、使用語彙、内容ともに、その抽象性に対する指摘が非常に多くなっていったが、使用語彙の点から見ると、両者の間に明確な差異はないようである。全体的に見ても、特に【少年高齢化文】では両者の使用比率がほぼ同じになっていることがわかる。このことから、それぞれが使用している語の意味の比率という点では、AI 生成文と人間執筆文はほぼ同一であるといえそうである。しかし、【思い出文】における「人間活動—精神および

行為」及び「自然物および自然現象」の比率の違いには着目すべきである。小さい差であるように思われるが、それぞれの総語数が1000を超えているため、数でいえば無視できない差であるといえる。AI生成文において、「人間活動—精神および行為」の比率が低くなっている要因として、調査項目⑪における表現態度の違いによる影響が考えられる。調査項目⑪では、AI生成文には「動き描写」の文章がないことが明らかとなった。先に述べたように「動き描写」がないということは、動詞以外の名詞や形容詞を中心に用いやすいということであるため、AI生成文における「人間活動—精神および行為」の比率が相対的に低いことには必然性がある。「自然物および自然現象」については、【思い出文】では旅先の景色や様子を描写するため、【少子高齢化文】に比べて比率が増えていることが考えられる。この比率の違いについても、AI生成文において表現態度のうち「ありさま描写」が多くなっていることが影響している可能性がある。「ありさま描写」では、物事のありさまを形容詞等を用いて表現する表現態度であるため、描写対象として「自然物および自然現象」が多く用いられていると考えることができる。

調査項目⑫で明らかになったのは、語の意味という点では人間執筆文とAI生成文に大きな差がなかったということ、語の意味の比率には調査項目⑪における表現態度が関連している可能性があることである。また、予備調査（結果2）で「抽象的である」といった回答が数多く集まったが、この調査においては両者の「抽象的關係」に分類される語数に明確な差は生じていないことが分かった。

調査項目⑩～⑫では語彙の多様性・N比率及びMVRから推定される文体・使用語彙の意味についての調査を行った。これまで述べてきた調査結果を改めて以下に示す。

- ①AI生成文の方が【少子高齢化文】・【思い出文】ともにTTRが大きい。
- ②AI生成文では【少子高齢化文】のTTRが大きくなっているが、人間執筆文では両者に違いはみられない。
- ③AI生成文では【少子高齢化文】の方がN比率が高い。
- ④AI生成文では表現態度が「要約的文章」「ありさま描写」のみとなっている。
- ⑤人間執筆文では、【少子高齢化文】・【思い出文】における表現態度が同一のものが多い。
- ⑥使用される語の意味の比率に大きな差はみられない。
- ⑦語の意味の比率には、調査項目⑪における表現態度が関連している可能性がある。

5. 考察

5-1 AI生成文に見られる特徴とその要因について

これまでまとめてきたAI生成文に見られる特徴を整理すると、大まかに

(I) 均一性／画一性

(人間執筆文に特徴的に見られる各調査項目におけるばらつきの小ささ)

(II) 適応性／優位性

(文章ジャンルに応じた適切な選択／人間執筆文よりも優れている点)

(Ⅲ) 技術的未熟性

(人間執筆文と対照的な特徴が現れるという技術的な課題)

の3項目に分類される。それぞれについて、具体的にどのような特徴が該当するのかを以下に示す。

(Ⅰ) 均一性／画一性

- ・読点使用について、文章やジャンルごとのばらつきが小さい。
- ・一文あたりの長さについて、文章やジャンルごとのばらつきが小さい。
- ・一文が極端に長い、もしくは短い文が含まれにくい。
- ・連続した文の長さの違いについて、文章やジャンルごとのばらつきが小さい。
- ・一段落あたりの文の数・字数について、文章やジャンルごとのばらつきが小さい。
- ・使用される接続詞が偏っている。
- ・使用されやすい文末表現が偏っている。

(Ⅱ) 適応性／優位性

- ・【思い出文】における接続詞の使用が少ない。
- ・【少子高齢化文】におけるくだけた感情表現の使用が見られない。
- ・【思い出文】における比喩表現の使用が多い。
- ・【少子高齢化文】・【思い出文】のいずれも TTR が人間執筆文よりも大きい。
- ・【少子高齢化文】における N 比率が高い。
- ・AI 生成文と人間執筆文の間で使用される語の意味の比率に大きな差はみられない。

(Ⅲ) 技術的未熟性

- ・読点の使用が多い。
- ・一段落あたりの文の数・字数が少ない。
- ・【少子高齢化文】において、個人の意見よりも一般的に知られる事実を述べる傾向にある。
- ・【思い出文】において、断定を避ける表現や抽象的な表現を用いている。
- ・「動き描写」の表現態度が一切現れない。
- ・個人の文体の表出と思われる傾向が現れない。

このうち、ここでは (Ⅰ)・(Ⅲ) について、なぜ AI 生成文に均一性／画一性という特徴が見られるのか、また技術的な不足がどのようにして現れているかについて考察することとする。(Ⅱ) については後述する。

まず、(Ⅰ) 均一性／画一性について、AI 生成文の各調査項目におけるばらつきが小さくなって

いることの要因として、AIの生成プロセスが関係していると思われる。本調査において使用した、「ChatGPT(GPT-3.5)」「Claude」「Gemini」「Copilot」「Grok」は大規模言語モデル(LLM)に基づき文章を生成している。柴藤(2023)によると、「言語モデルとは文字の連続から次の文字、あるいは欠落した文字を予測する確率過程を表したもの」であり、「与えられた文章に対してもっともらしい文章を紡いでいく機械にすぎない」ため、「大規模言語モデルに問い合わせを入力して、その答えが合っていた、間違っていたというのは、見当違いな使い方」だという。ただしそこにTransformerという技術が登場し、予測効率が飛躍的に向上したことで、LLMがユーザーの質問に答えることができるようになったと述べている。これはつまり、生成AIが文章を生成する際には、次に来る確率が高い語が選ばれているだけにすぎず、文章全体としての機能は考慮されていないということである。学習データが大規模であるがゆえに、間違いが起こりづらいため、生成AIが内容の構成を行って生成しているわけではないのである。よって、確率の問題でいえば、次に来る語というのはある程度限られてくるため、自ずと生成される内容に偏りが生じてくるだろう。また、柴藤(2023)によると、LLMの構築における学習データは①Webページ②会話テキスト③書籍④専門的なテキストデータから収集しているという。これらは内容・文体・媒体・想定される相手などがデータによってさまざまであるが、LLMはこのジャンルの違う文章を統合的に学習するため、結果として収集データの平均値に収束する傾向があるのではないかと考えられる。調査項目③の一文の長さの上位下位10%が生成されにくいのも、それらの莫大なデータのなかで統計的に現れにくいためであると考えられる。

一方で人間の文章生成プロセスは、生成AIと全く異なっている。人間が文章を生成する際の心理的な動きや脳の働きはさまざまな研究分野にまたがっているため、ここでは詳細な言及はしないが、人間の文章生成の過程に関する認知過程を示す古典的なモデルとして、認知心理学におけるライティングプロセス研究というものがある。Linda Flower and John R. Hayes(1981)によれば、認知過程モデルはplan(計画)・translate(翻訳)・review(推敲)という3つの主要なプロセスによって示されるという。また、

And yet the first assertion of this cognitive process theory is that people do not march through these processes in a simple 1, 2, 3 order. Although writers may spend more time in planning at the beginning of a composing session, planning is not a unitary stage, but a distinctive thinking process which writers use over and over during composing. Furthermore, it is used at all levels, whether the writer is making a global plan for the whole text or a local representation of the meaning of the next sentence.

Linda Flower and John R. Hayes(1981)「A cognitive process theory of writing」

とあるように、このモデルでは単に plan (計画)・translate (翻訳)・review (推敲) の順に進むのではなく、執筆中に繰り返し用いる思考のプロセスとなっている。plan (計画) が執筆前に留まらず、文章作成中のあらゆるレベルにおいて使用されるように、それぞれが複雑に交差しあって文章が生成されるのである。この認知過程モデルは、生成 AI が大量のテキストデータから学習を行い、語単位で次に来る言葉を予測して文章を紡ぐのに対し、人間では書きはじめや執筆途中に内容を計画してからそれを言語化し、文章を生成しているという、文章産出における決定的な両者の違いを示している。AI 生成文に偏りがあるのは、今回使用した AI 全てが LLM を使用しており、次に来る確率が高い語を予測して文章を生成しているためであると考えられる。人間執筆文においては、認知過程モデルを個人個人のサイクルで繰り返しながら文章を生成しているため、生成プロセスが均一でなくなり、各項目のばらつきが大きくなっていると考えられる。また、人間が文章を書く際には、その時々状況によって、完成した文章に大きな変化が生じるものである。例えば、簡単に思いつくものでいえば、文章を書く直前に見たニュースに強い影響を受けたり、文章を書く時間がなく急いで書いたりするなど、自身やまわりの状況等に大きく左右される場合もあるだろう。生成 AI はその点、いつ生成したとしても条件がそろっているため、画一的でばらつきの小さい文章を生成するのではないかと考える。

次に、(Ⅲ) 技術的未熟性について、本調査において明らかとなった生成 AI の未熟性はさらに「人間執筆文にはみられない特徴」と「表現方法の偏り」という 2 軸に分けられる。

まず、「人間執筆文にはみられない特徴」に分類されるのは

- ・読点の使用が多い。
- ・一段落あたりの文の数・字数が少ない。
- ・個人の文体の表出と思われる傾向が現れない。

の 3 つの特徴である。これは、人間執筆文と対照的な特徴が現れているという技術的な課題を示すものである。前述の栄藤 (2023) の述べる通り、生成 AI は次に来る語を予測しているに過ぎないため、人間執筆文の特徴が現れないからといって、それを技術不足であると指摘するのは見当違いであるように思われる。しかしながら、実際の AI 使用において、要約や文章生成といったテキストのアウトプットを行うユーザーが一定数いる以上は、生成する文章が自然であるに越したことはないだろう。そのような点でいえば人間執筆文に見られる特徴が AI 生成文に反映されるとその分生成文が自然な「人間らしさ」を含むようになるため、技術的な発展の余地となるということはいえるだろう。

次に、「表現方法の偏り」に分類されるのが

- ・【少子高齢化文】において、個人の意見よりも一般的に知られる事実を述べる傾向にある。
- ・【思い出文】において、断定を避ける表現や抽象的な表現を用いている。

・「動き描写」の表現態度が一切現れない。

の3つの特徴である。これらは、AI生成文が意見を述べる表現を用いることや、断定表現を用いることを避けたり、動詞を用いた「動き描写」以外の表現態度を取ったりするという表現上の偏りを示す。この偏りは（I）で述べたような、生成プロセスによる均一性や画一性とは異なり、婉曲的な表現を選ぶことで間違いを避けるようにする処理であるように思われる。AIが断定を避ける傾向があることを示す関連研究として Olga Boginskaya（2025）の研究がある。Olga Boginskaya（2025）は、工学部の大学院生が執筆した研究提案書とAIによって編集された研究提案書を比較し、AIが編集したものは Hedges（婉曲）や Attitude markers（態度マーカー）が大幅に増加した一方で、Boosters（強調表現）や Self-mention（自己への言及）が有意に減少したことを明らかにした。これは、AIが編集することで慎重（cautious）で非個人的な（impersonal）文章へシフトしていることを示唆する。また、Mohammad Alia・Abdussalam M. Aliia（2025）は学術論文における明確な hedging（婉曲表現）及び Boosting（強調表現）を ChatGPT がどのように言い換えるかについて調査を行った。結果として、もと意味を保持しながらも（maintains the original meaning）、hedging（婉曲表現）及び Boosting（強調表現）の強度を和らげ（moderates the intensity）、誇張表現を避ける（avoid overstatement）傾向にあることを明らかにした。これは過剰な表現を和らげ、より一般的な表現に言い換えているということを示す。これらの研究が示すように、AI生成文では不確実性を表す語が増え、婉曲的な表現に偏りやすいという傾向があるが、それは不正確な生成を避けるためであると考えられる。よってユーザーが質問等をプロンプトとして入力した場合にはそのような配慮が必要となることがあるといえるが、本調査におけるプロンプトは質問に対する応答ではなく文章作成である。特に【思い出文】においては、個人の体験を記述するものであるので不正確で事実と異なった内容を生成し得ないにも関わらず、生成された文章には婉曲表現が散見される。本来ならば、意見文や作文といった文章では不確実性を示す表現を使用する必要がないという点から、AIではプロンプト及び作業内容に依った語の選択ができていないといえる。つまり、婉曲表現が必要な場合と必要ない場合での使い分けができていないという点において技術的に未熟であるということである。以上のように、（III）技術的未熟性では、AI生成文に見られる特徴が、AIの技術的な不足に起因しているといえるのである。

5-2 「AIらしさ」についての認識

5-2-1 「AIらしさ」という規範からのずれ

ここでは、5-1 で示した、

（II）適応性／優位性

- ・【思い出文】における接続詞の使用が少ない。
- ・【少子高齢化文】におけるくだけた感情表現の使用が見られない。

- ・【思い出文】における比喩表現の使用が多い。
 - ・【少子高齢化文】・【思い出文】のいずれも TTR が人間執筆文よりも大きい。
 - ・【少子高齢化文】における N 比率が高い。
 - ・AI 生成文と人間執筆文の間で使用される語の意味の比率に大きな差はみられない。
- という特徴について述べたい。

まず、【思い出文】における接続詞の使用が少ない／【少子高齢化文】におけるくだけた感情表現の使用が見られない／【思い出文】における比喩表現の使用が多い／【少子高齢化文】における N 比率が高い、という特徴は、いずれもそれぞれの文章ジャンルに合致した表現を選択できているということを示す。具体的には、【思い出文】における接続詞の使用が少ないのは、論理性よりも情緒的な表現のほうが重視されるという作文の特性に適応しているといえる、といったようなことである。予備調査（結果 2）において、文章のジャンルに対する言及として「〇〇には～すぎる」といった回答が「AI らしさ」の要因としていくつか挙げられたことや、感情表現・比喩表現の使用が「人間らしさ」として捉えられていたことから読み取れる通り、AI 生成文では文章のジャンルに応じた適切な表現や、感情・比喩表現といった発展的な表現ができない、というようなステレオタイプが回答者のなかに存在しているように思われる。しかしながら、少なくとも文章表現の点でいえば今回それとは異なる結果が得られた。これは、予備調査の回答者たちが持つ「AI らしさ」という規範から逸脱した結果であるといえる。そしてこれらの AI 生成文に見られる適応性は人間執筆文では見られないため、その点では AI 生成文の方が優位性を有しているといえるだろう。

また、【少子高齢化文】・【思い出文】のいずれにおいても TTR が人間執筆文よりも大きいという特徴も AI 生成文の優位性を示している。一般的には使用語彙の重複が少ない方が、表現の幅がある「良い文章」であるように思われるからである。この点についても、予備調査（結果 2）で「人間らしさ」の要因として、人間は同じ言葉を繰り返し使わずに言葉を変えているといった回答があったため、回答者の「AI 生成文は同じ言葉を使いやすい」といった規範意識から逸脱していることがわかる。語の意味の比率についても同様で、「AI は抽象的な語を用いやすい」といったイメージは実際の結果としては現れず、人間執筆文と AI 生成文でほぼ同じ比率を示していた。

以上のことから、予備調査における回答者の「AI らしい」と感じる点と、実際に得られた結果が必ずしも一致していないことがわかる。ではなぜ、「AI らしさ」という規範と実際の AI 生成文に見られる特徴との間にずれが生じているのだろうか。その要因はいくつか考えられる。まず、回答者の認識が、生成 AI が普及し始めた 2022 年ごろの性能についてのものであるということである。初めて生成 AI を使用した、もしくは見聞きした際の印象がそのまま「AI らしさ」の規範につながっている可能性がある。生成 AI はここ数年で飛躍的に技術が向上し、その性能は初期と比べて全く別のものとなっているが、この生成 AI の性能の向上を把握していたとしても、「AI らしさ」の規範意識が初めて生成 AI に

触れたときに構築されたということは十分に考えうることである。予備調査（結果2）で「人間らしさ」の特徴として挙げた、感情・比喻表現の使用等の回答は、AIがまだこのような文章に多様性を持たせるような表現ができなかった頃の認識であると捉えることもできそうである。このように、「AIらしさ」の規範を構築した生成AIが、過去の性能が劣る生成AIであるというのが考えうる要因の一つであると実際の性能のずれが上記の要因となっていると考えることができる。

また、回答者のAI使用が限定的であることも要因として想定される。予備調査におけるアンケートでは、AIツールの使用について、「かなり使う」「使う」「ほとんど使わない」「使わない」の4つの選択肢を設定し、日常的なAIの使用について調査した。すると、7割以上が「使う」を選択しており、「ほとんど使わない」「使わない」を選択したのは3人であった。よって、回答者はある程度AIを日常的に使用していることがわかったが、その使用用途については調査できなかったため、総務省が発行する「令和7年度版情報通信白書」の「個人におけるAI利用の現状」を参照すると、「コンテンツの要約・翻訳」・「調べもの」が既に利用している機能のなかで利用率が高かった。総務省の調査によれば、多くの人が要約・検索といった用途のみで使用しているため、文章のジャンルに応じた表現の使い分けや、人間執筆文を上回る語彙の多様性を持つということを認識してないということが考えられる。

以上のように「AIらしさ」という規範と実際のAI生成文に見られる特徴との間にずれが生じる要因はいくつか考えられるが、このずれによって生成AIに対するステレオタイプが徐々に構成されていくと思われる。

5-2-2 認識しやすい「AIらしさ」と認識しにくい「AIらしさ」

予備調査（結果2）では、「AIらしい」「人間らしい」と感じた点について、

- (ア) 文法的特徴への言及
- (イ) 語彙への言及
- (ウ) 内容への言及
- (エ) 文章表現への言及
- (オ) その他

の五つに分類した。そのうち、本調査の結果、実際の特徴として表れたのは、(ア) 文法的特徴への言及に属する「読点使用の多さ」のみであった。「段落の分け方への違和感」や「大きな感情表現への違和感」なども言及はされていたが、具体的に出現回数の多寡などに触れ、それが結果と完全に一致していたのは「読点使用」のみである。

本調査では内容的な矛盾等の判断は結果が恣意的になる恐れがあったため、今回は行えなかったが、調査において有意な差が確認されたのは主に(ア) 文法的特徴への言及のうち、文章の視覚的・形式的な要素であった。予備調査（結果2）において、文章の視覚的・形式的な要素に言及していたのは、148件のうちたった10件に留まっており、そのう

ちの4件は「読点使用」についての回答である。指摘が多かった、(イ) 語彙への言及、(ウ) 内容への言及、(エ) 文章表現への言及では、(ウ) の調査を行っていないにしても、実際に見られる特徴と一致した指摘がひとつも確認されなかったことから、その認識が正しいかはさておき人間が認識しやすい規範としての「AIらしさ」と、認識しにくい本来の「AIらしさ」があるといえるだろう。予備調査と本調査を踏まえた、それぞれの「AIらしさ」に含まれる判断要素を以下に示す。

○人間が認識しやすい規範としての「AIらしさ」

- ・ 読点使用
- ・ ある特定の語彙の使用
- ・ 内容の抽象性・飛躍・予定調和
- ・ 過剰な感情表現
- ・ 説明的表現の多用

○人間が認識しにくい本来の「AIらしさ」

- ・ ひとつの文章内における一文の長さ、連続した文の長さの違い、一段落あたりの文の数・字数のばらつきの小ささ
- ・ 断定を避ける表現の使用
- ・ TTRの大きさ(語彙の豊かさ)
- ・ 比較的かたい文体の文章におけるN比率の高さ

上記の人間が認識しにくい本来の「AIらしさ」を見ると、「断定を避ける表現の使用」以外は全て統計的特徴であるが、一文の長さのばらつきやN比率については詳細に算出しなくても、文章を読む段階で認識できる特徴である。それにも関わらず、このような「AIらしさ」が認識されにくい要因のひとつとして考えられるのが、前述の「AIらしさ」という規範からのずれが関与しているためであるということである。回答者の内省として、生成AIは「機械的」「抽象的」「未発達」といったイメージがあれば、それに対応するような特徴を探すはずである。AIに対するステレオタイプが結果としてそれに合致する特徴に意識を向かわせ、実際の文章に見られる特徴よりも「AIらしい」点として認識されやすい可能性がある。次に、使用回数等の統計的特徴よりも、ある特定の語など、分かりやすく指摘のしやすい特徴に「AIらしさ」意識が向かいやすいということも考えられる。今回の予備調査では、アンケートの冒頭にAI生成文と人間執筆文をランダムに並べているという情報を与えたため、「AIらしい」点を探しながら文章を読んだと推測できる。その場合、全体的な傾向よりも、文章の途中で違和感を持った語や表現、内容を「AIらしさ」として挙げやすいのではないかと思われる。加えて、特定の語や表現を抜き出して、「AIらしい」ということは比較的容易であるが、言語化できない違和感については不自然さを感じても自由記述では記述しないということも考えられるだろう。三点目に、認知心理学の研究分野である確認バイアスもこれに関連している可能性がある。確認バイアスは、『有斐

閣 現代心理学辞典』によると「仮説検証のやり方で、自分の考えや期待に合う事例（正事例）ばかりを生成したり収集したりする、あるいは、そのような情報を選択的に認知したり重視したりする傾向のこと。」とされている。つまり、文章を読む過程で「AIらしい」と感じた文章については、「この文章はAIによるものである」という自分の考えに沿う特徴を収集するため、もしそこに統計的な「人間らしい」特徴（ばらつきや一文の長さ等）があったとしても、「AIらしさ」を示す特徴的な要素に意識が向きやすくなるため、認識されにくい「AIらしさ」「人間らしさ」が生じるとも考えられる。

このような認識されやすさとされにくさには、その他さまざまな要因が絡み合っていると思われるが、認識されにくい特徴でも無意識下ではそれを認識している可能性がある。予備調査（結果1）では「自然スコア」「読みやすさスコア」「感情スコア」「人間らしさスコア」という4つの指標を設けて、それぞれを十段階評価させたが、「人間らしさスコア」以外のスコアが平均以下であった人間執筆文が、「人間らしさスコア」では上から三番目で評価されていた。これは、「自然さ」や「読みやすさ」「書き手の感情の豊かさ」以外の要因が、回答者に人間執筆文であると思わせたということである。認識されやすい「AIらしさ」の項目は、「自然さ」「書き手の感情の豊かさ」に通ずる内容のものも多いため、その評価が低かったということは、認識されにくい統計的特徴が「人間らしさ」の要因になったと考えることもできるかもしれない。本論文では予備調査と本調査を直接つなげるような調査を行っていないため、あくまで推測の域であるが、予備調査（結果1）で得られた上記の結果は研究の余地があるといえるだろう。

5-3 人間らしい「自然な日本語」とは何か

ここまで述べてきたAI生成文に見られる特徴を踏まえ、ここでは人間らしい「自然な日本語」とは何かについて考察する。以下では「自然さ」をもたらす(i)～(iii)の要素に分けて論じる。

(i) ばらつきから見る自然さ

本研究で最も明確に結果として表れたのは、AI生成文におけるばらつきの小ささである。読点の使用、一文の長さ、一段落あたりの文の数・字数、接続詞、文末表現など、多くの調査項目でAI生成のデータの偏りが確認された。これは一つの文章単位でも、ジャンル単位でも同様のことがいえる。これは前述の生成AIの文章産出プロセスによる内容の均一化の表れである。反対に、人間執筆文ではあらゆるレベルにおいて、ばらつきが大きくなっている。それはこれまで述べてきたように、人間執筆文における生成プロセスの多様性や、その時々状況に左右されやすいという特徴に起因するものである。一般的には、「自然な日本語」とは文法的に正しく、全体としての揺れ・ばらつきが小さいものであるかのように思われるが、AI生成文に見られる特徴を踏まえると、むしろそのばらつきこそが「人間らしさ」を補強しており、「自然さ」をもたらしている。

(ii) 不完全性から見る自然さ

5-2-1 では、AI 生成文の優位性について、AI 生成文では文章ジャンルに応じた適切な表現方法が選択できていることを述べた。例えば、【少子高齢化文】において、くだけた感情表現を使用するのは一般的に考えるとふさわしくない。しかしながら、ある特定の文章だけでなく、人間執筆文全体の特徴として、文章ジャンルを問わない表現が多く見られた。これは、人間は意見文などといった各文章ジャンルのテンプレート的な体裁に縛られず、ある程度許容できる範囲に幅を持って文章を執筆しているということである。この許容できる幅は人によって異なるが、それぞれの幅のなかでくずした表現や心情表現等を組み込んでいるのが全体の特徴として現れたのだろう。また、TTR について、人間執筆文は AI 生成文よりも小さくなっているが、その点では人間執筆文は相対的に語の重複が多い不完全な文章と捉えることができるだろう。このように、文章ジャンルにそぐわない表現を用いたり、表現に重複が見られたりするという特徴は、人間特有のものであり、AI 生成文では機械学習によって見られなくなるため、その不完全性がむしろ「人間らしさ」の指標になり得る。

(iii) 統一性から見る自然さ

(i) (ii) とは異なり、統一性も「人間らしさ」の要因となりうる。これは一つの文章だけで判断する要素ではなく、いくつかの文章を読み比べた際に共通する個人の書き方や表現の癖という点における統一性である。調査項目⑩では、人間執筆文において AI 生成文に比べて【少子高齢化文】・【思い出文】の表現態度が同一である例が多く見られた。これは文章ジャンルに関わらず、N 比率や構成品詞率が似通った数値になるということであり、個々人にそれぞれ好む語や表現があるということを示唆する。こういった個人が使いやすい語や表現はしばしば文体という言葉で形容されるが、その文体が AI 生成文には見られなかった。これは生成 AI がプロンプトに大きく依存した生成を行うことに起因していると考えられる。つまり、AI 生成文では生成 AI そのものに文体があるのではなく、出力されたプロンプトが生成文の文体を規定するということである。

ここで、(iii) における統一性と (i) におけるばらつきについての相違を述べたい。統一性とばらつきがどちらも「自然さ」をもたらすというと、矛盾しているかのようと思われるが、(i) では一つの文章の中でのばらつきという、「文章レベルでのばらつき」を示しているのに対し、(iii) では複数の文章を横断した、「文体レベルでのばらつき」を示している。つまり、AI 生成文では文章レベルでは均一で画一的でありながら、文体レベルでは一貫性が欠如しているということである。よって、統一とばらつきという相反する語を使用しているが、判断のレベルが異なっているためこれは矛盾しない。

以上の考察から、人間的な「自然な日本語」とは上の (i) ~ (iii) のような要素を含むものであると言えそうである。これらは一般的に自然であると捉えられるような、文法的な正しさとは必ずしも一致するわけではない。生成 AI に見られる「AI らしさ」との比較によって得られた、揺らぎと統一性という一見すると矛盾しているかのような性質が、むしろ「人間らしい」「自然さ」をもたらしているのである。

6.おわりに

本研究では、AI生成文に対する「不自然さ」を分析し、「AIらしさ」を構成する要素や言語的特徴を明らかにすることで、逆説的に人間的な「自然な日本語」とはどのようなものであるかを示すことを目的として調査を行った。結果として、人間らしい「自然な日本語」を構成する要素として (i) ばらつき (ii) 不完全性 (iii) 統一性という3点を見出すことができた。しかしながら、今回の調査は、調査対象テキストが40文と極めて少なく、また文章ジャンルも二つに絞ったため、全てのAI生成文で一貫する特徴であるとはいえ、また、生成AIは技術的な進歩により今後発展していくことが予測されるため、あくまで現時点での分析にすぎない。今後はコーパスなどを用いて、大規模に調査を行うとともに、今回の調査で得られた要素以外の内容的な「AIらしさ」「人間らしさ」の分析を進める必要がある。特に予備調査(結果1)において見られた、「人間らしさスコア」だけが低い人間執筆文にどのような「人間らしさ」が内在しているのか、調査を進めさまざまな可能性を考慮したうえで考察を重ねたい。

謝辞

本研究においてアンケート調査及び作文作成にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

7.参考文献

—著書—

- ・ 彬子女王・ほしよりこ(2025)『飼い犬に腹を噛まれる』(PHP研究所)
- ・ 伊藤雅光(2002)『計量言語学入門』大修館書店
- ・ 岩田祐子、重光由加、村田泰美(2013)『概説 社会言語学』ひつじ書房
- ・ 岩田祐子、重光由加、村田泰美(2022)『改訂版 社会言語学—基本からディスコース分析まで』ひつじ書房
- ・ 樺島忠夫・寿岳章子(1965)『文体の科学』綜芸舎
- ・ 計量国語学会編(2017)『データで学ぶ日本語学入門』朝倉書店
- ・ 辻(辻はじ) 幸夫監修・中本敬子・李在鎬編(2011)『認知言語学研究の方法 内省・コーパス・実験』ひつじ書房

—論文—

- ・ Adam Dahlgren Lindström, Leila Methnani, Lea Krause, Petter Ericson, Íñigo Martínez de Rituerto de Troya, Dimitri Coelho Mollo, Roel Dobbe (2025) 「Helpful, harmless, honest? Sociotechnical limits of AI alignment and safety through Reinforcement Learning from Human Feedback」 Ethics Inf Technol, DOI: 10.1007/s10676-025-09837-2

- ・ Wataru Zaito, Mingzhe Jin (2023) 「Distinguishing ChatGPT(-3.5, -4)-generated and human-written papers through Japanese stylometric analysis」 PLoS One.;18(8) DOI: 10.1371/journal.pone.0288453.
<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37556434/>
- ・ Heather Desaire, Aleesa E. Chua, Madeline Isom, Romana Jarosova, David Hua (2023) 「Distinguishing academic science writing from humans or ChatGPT with over 99% accuracy using off-the-shelf machine learning tools」 Cell Reports Physical Science Volume 4 Issue 6
<https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S266638642300200X>
- ・ Linda Flower and John R. Hayes (1981) 「A cognitive process theory of writing」 College Composition and Communication 32 pp.365-387
https://www.jstor.org/stable/pdf/356600.pdf?refreqid=fastly-default%3Ac1fa64cea74947c53191aac67438240d&ab_segments=&initiator=&acceptTC=1
- ・ Mohammad Alia, Abdussalam M. Aliia (2025) 「How AI Tools Affect Discourse Markers When Paraphrased」 Using AI Tools in Text Analysis, Simplification, Classification, and Synthesis (IGI Global), pp. 321-350 DOI: 10.4018/979-8-3693-9511-0.ch011
https://www.researchgate.net/publication/388999631_How_AI_Tools_Affect_Discourse_Markers_When_Paraphrased
- ・ Olga Boginskaya (2025) 「Friend or Foe? How ChatGPT contributes to disciplinary socialization」 DOI:10.2139/ssrn.5601960
<https://ssrn.com/abstract=5601960>
- ・ 井関龍太 (2023) 「人工知能の文章に文体はあるか チャット AI が生成した物語文章の文体分析」『日本心理学会大会発表論文集』 p.638、公益社団法人日本心理学会
https://www.jstage.jst.go.jp/article/pacjpa/87/0/87_1D-066-PL/_pdf/-char/ja
- ・ 岩田理央、綱川隆司、西田昌史 (2025) 「大規模言語モデルにより生成された日本語テキストの検出性能の検証」『人工知能学会全国大会論文集』 第 39 回(2025)
https://www.jstage.jst.go.jp/article/pjsai/JSAI2025/0/JSAI2025_4G1GS604/_pdf/-char/ja
- ・ 柴藤稔 (2023) 「生成 AI の発展と新たなコンテンツ経済圏」総務省 学術雑誌『情報通信政策研究』 7 巻 1 号 pp. IA-25 – IA-51
https://www.soumu.go.jp/main_content/000914221.pdf
- ・ 杉崎 光一、阿部 雅人、全 邦釘 (2023) 「大規模言語モデルの専門領域への 適用に関する検討」『AI・データサイエンス論文集』 4 巻 3 号 pp.474-481
- ・ 樽本空宙、畠垣光希、宮田莉奈、梶原智之、二宮崇 (2024) 「ChatGPT の日本語生成能力の評価」『自然言語処理』 31 巻 2 号 pp.349-373、一般社団法人言語処理学会
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jnlp/31/2/31_349/_pdf/-char/ja

- ・堤智昭、小木曾智信 (2023) 「複数の UniDic 辞書による形態素解析支援ツール『Web 茶まめ』の実装と運用」、情報処理学会論文誌、64 巻 3 号 pp.749-757
- ・仁谷安里、鏝分花梨、山本皓太、町田比奈子、須藤修 (2023) 「GPT-4 と人間の生成した文章の読者認識の違い—因子分析による信頼性評価—」『社会情報学会大会研究発表論文集』2023 巻 pp.120-124、一般社団法人社会情報学会
https://www.jstage.jst.go.jp/article/ssiproceedings/2023/0/2023_120/_pdf/-char/ja
- ・藤木 大介、山川 真由 (2017) 「文章産出における文の産出プロセス」『日本心理学会大会発表論文集』第 81 回 p.688
https://www.jstage.jst.go.jp/article/pacjpa/81/0/81_2D-056/_pdf
- ・李在鎬 (2021) 「書くことを支援する自動評価システム「jWriter」」『日本語学』40 巻 4 号 pp.42-53 明治書院

—WEB サイト—

以下、最終閲覧日は全て 2026.02.02 である。

- ・国立国語研究所、「web 茶まめ」

<https://chamame.ninjal.ac.jp/>

- ・ジャパンナレッジ、『有斐閣 現代心理学辞典』検索項目「確証バイアス」

https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=5350006560_33310#bun3331001

- ・総務省、2024.07 「令和 6 年度版 情報通信白書」

<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r06/pdf/index.html>

- ・総務省、2025.07 「令和 7 年度版 情報通信白書」

<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/r07.html>

- ・総務省 経済産業省、2025.03.28 「AI 事業者ガイドライン (第 1.1 版)」

https://www.soumu.go.jp/main_content/001002576.pdf

- ・デジタル庁、2025.05.27 「行政の進化と革新のための生成 AI の調達・利活用に係るガイドライン」

https://www.digital.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/e2a06143-ed29-4f1d-9c31-0f06fca67afc/80419aea/20250527_resources_standard_guidelines_guideline_01.pdf

8.補助資料

8-1 予備調査におけるアンケート

【文章 1】新聞記事

【2025 年 11 月 19 日 朝刊経済面】

政府は昨日、2026 年度予算案の概算要求を概算基準の 1.5 倍に当たる 118 兆円規模で認める方針を固めた。背景には、物価高対策としてのエネルギー・食料品補助金の継続と、防衛費の GDP 比 2%目標達成に向けた増額がある。財源確保のため、法人税に新たな

「防衛特別付加税」を導入する方向で調整に入った。

市場では「実質的な増税」と受け止められ、日経平均は一時700円超下落。財務省幹部は「財政健全化は堅持する」と強調するが、PB黒字化目標は再び先送り濃厚。来年夏の参院選を控え、与党内のバラマキ圧力が強まる中、財政規律と国民負担のバランスが今後の最大の焦点となりそうだ。

→AI「Grok」で生成

【文章2】 ビジネスメール

件名:書類不備のお詫び

株式会社〇〇
〇〇部 〇〇様

いつも大変お世話になっております。
株式会社△△の□□でございます。

この度は、提出いたしました書類に不備があり、誠に申し訳ございませんでした。ご指摘いただいた点につきまして、早急に修正し、改めて提出させていただきます。

お忙しい中、ご確認のお手間をおかけし、重ねてお詫び申し上げます。今後はこのようなことがないように、提出前の確認を徹底してまいります。

何卒ご容赦くださいますよう、お願い申し上げます。

今後とも変わらぬご指導ご鞭撻のほど、よろしく願いいたします。

株式会社△△ 〇〇部 □□ 電話:XXX-XXXX-XXXX メール:xxx@example.com

→AI「Claude」で生成

【文章3】 意見文

オンライン教育が教育を受ける際の選択肢や方法の1つになることには、賛成である。

まず、地理的・経済的・個別的な問題で、オンラインでないと教育を受けられない人にとっては、オンライン教育の普及は福音に他ならない。また、遠隔地同士での双方向なやり取りや匿名での自由な討論などは、対面での教育では実現できないことである。オンライン教育が今まで不可能だったことを可能にした功績は大きい。

一方で、対面でないと経験できないことが多いのも、また事実であろう。特に、義務教育段階の年齢では、対面の教育は欠かせない。人と人との直接的な関わりの中でしか身に付かないものも確かに存在すると思う。つまり、オンラインとオフラインのバランスが非常に大切だと考える。

→人間 50代男性が執筆

【文章4】ブログ

最近の私のささやかな楽しみは、個性豊かなカフェを巡ることです。ただコーヒーを飲むだけでなく、その空間や雰囲気全体を楽しむのが醍醐味！

例えば、古い倉庫を改装したお店では、無骨なデザインと香ばしい豆の香りが絶妙に調和し、まるで時間がゆっくり流れるような感覚になります。一方で、洗練された内装のパティスリーカフェでは、芸術的なスイーツと美しいラテアートに心が躍ります。

仕事や家事の合間に、新しいカフェの扉を開ける。期待を胸に注文し、窓際の席で人通りを眺めながら一口。この瞬間が、何気ない日常を特別なものに変えてくれます。

あなたも、お気に入りの一杯と出会う旅に出てみませんか？きっと、素敵な発見がありますよ！

→AI「Gemini」で生成

【文章5】小説の書き出し

港町の朝は、潮の香りと鴉の鳴き声で始まる。石畳の路地を抜けると、古びた書店の看板が目に入った。「月読堂」――祖父が遺したこの店を継いで三年、私はまだ店主という肩書きに慣れていない。

扉を開けると、紙とインクの匂いが鼻をくすぐる。いつもの朝のルーティン。窓を開け、埃を払い、棚を整える。だが今朝は何か違っていた。カウンターの上に、見覚えのない古い革装丁の本が置かれている。昨夜、確かに施錠したはずなのに。表紙には金文字で『航海日誌』とだけ記されていた。

ページを開いた瞬間、潮騒が耳の奥で響いた。文字が波のように揺らめき、別の世界への扉が静かに開き始める。祖父が語っていた「迷い込む本」の伝説が、現実になろうとしていた。

→AI「claude」で生成

【文章6】エッセイにおける、ある章の冒頭

何を隠そう（別に隠してはいないのだけれど）、私は大浴場をこよなく愛している。宿のお部屋にどんなに立派なお風呂がついていたとしても、大浴場があれば、私は必ず大浴場

に行く。温泉ならば、なおよしである。できるならば、到着後、寝る前、朝と3回行きたい。

お湯をわざわざためなくても、扉を開ければなみなみとお湯をたたえた湯舟が待っていてくれるというあの幸せ感。手足をうーんと伸ばして、外の景色を見ながらぼーっとしていると、いつの間にか時間を忘れてしまう。

そんなわけで、近頃は忙しくてなかなか時間が取れないのだけれど、友人たちと時折出かける温泉旅行は、私にとって至福の時間である。

→人間 実際には出版されているエッセイより引用

引用：彬子女王・ほしよりこ(2025)『飼い犬に腹を噛まれる』(PHP 研究所)

【文章7】メッセージのやり取り

Aさん Bさん！卒業旅行の計画、そろそろ本格的に決めない？😊 候補はどこがいいかな？

Bさん Aさん、いいね！私はずっと沖縄に行きたかったんだ💎 3月上旬くらいはどうか？まだそんなに高くないはず！

Aさん 沖縄、最高だね！賛成👍 3月上旬で日程を調整してみるよ。具体的には3/5～3/8の4日間とか？レンタカー必須だよ！🚗

Bさん バッチリ👌 その日程で大丈夫だよ！レンタカーで美ら海水族館や古宇利島に行きたいな！あとはホテルの雰囲気もこだわりたいかも。おすすめとかある？

Aさん じゃあ、その日程で予約サイトをいくつか見てみるね。ホテルはリゾートっぽいところがいいかな？🏨 見つけたらURL送るね！予算は一人5万円前後で考えてるけど、どう？

Bさん ありがとう！5万円前後なら全然OK！また連絡待ってるね！楽しみすぎるー！😍

→AI「Gemini」で生成

【文章8】手紙

お誕生日おめでとう！

もう〇〇歳だね。早いなあ。本当にあっという間で、初めて会った日のこととか、よく一緒に遊んだあの夏のこととか、ふと思い出しては「もうそんなに経ったのか…」ってびっくりしてるよ。

いつもそばで笑ってくれて、時には真剣に話を聞いてくれて、本当にありがとう。君といると、なんだか安心するし、自分らしくいられるんだよね。そんな存在がいるって、すごく幸せなことだなんて、改めて思うよ。

これからも一緒にバカなことしたり、くだらないことで笑い合ったり、たまに真面目な話もして、いろんな思い出を作っていけたらいいな。

今年も君が大好きなものに囲まれて、笑顔が絶えない1年になりますように。心から願ってるよ！

大好きだよ、またね！

〇〇より

→AI「Grok」で生成

【文章9】日記

今日は秋晴れのドライブ日和だったので、車で一時間程の郊外の中華料理店までランチに行くことにした。道中の木々は赤や黄色に色づき、青い空によく映えていた。秋の景色を堪能しながらドライブを楽しみ、あと少しで目的地という所で、車両通行止めのため迂回路を通るよう誘導された。どうやら高校生の駅伝大会に伴う交通規制らしい。方向音痴の私はすっかり動揺し、まわりの景色を楽しむ余裕は全くなかった。今までに通ったことのない山道を時々不安になりながら運転していると、男子高校生が続々と走ってくる姿が反対車線に見えた。予定よりも二十分近くオーバーしたが、ナビのおかげで何とか店に到着。初めての道の運転で疲れたが、高校生たちの頑張る姿は秋の紅葉より美しかった。

→人間 50代女性が執筆

8-2 本調査のテキスト

【少子高齢化文】

AI 1

少子高齢化は、日本社会が直面する最も深刻な課題の一つだと考える。出生率の低下と平均寿命の延伸が同時に進むことで、社会の構造そのものが大きく変化しつつある。まず、労働力人口の減少は経済成長の停滞を招き、企業の生産性や国際競争力にも影響を与える。また、現役世代が減る一方で高齢者が増えることで、年金や医療、介護といった社会保障制度の負担が急速に重くなっている。このままでは制度の持続可能性が危ぶまれる状況だ。

一方で、少子高齢化は単なる「問題」ではなく、社会の価値観や働き方を見直す契機にもなり得る。例えば、子育てと仕事を両立しやすい環境づくりや、若者が将来に希望を持てる社会の実現は、出生率の回復につながる可能性がある。また、高齢者が活躍できる場を広げることで、経験や知識を社会に還元し、世代間のつながりを強めることもできる。

少子高齢化を克服するには、単に人口を増やすことだけでなく、誰もが生きやすい社会をつくるという視点が重要だ。社会全体で課題を共有し、柔軟で持続可能な仕組みを築くことが求められている。

AI 2

少子高齢化は、日本社会の将来を左右する大きな課題だと考える。出生率の低下と平均寿命の伸びが同時に進むことで、社会の構造そのものが変化しつつある。特に深刻なのは、働き手の減少による経済力の低下と、医療・介護など社会保障費の増大だ。現役世代の負担が重くなる一方で、高齢者が安心して暮らせる環境を維持することも求められるため、従来の仕組みでは対応しきれない局面に来ている。

この問題を解決するには、単に出生率を上げる施策だけでは不十分だ。子育て支援の充実はもちろん重要だが、働き方改革や教育制度の見直し、地域コミュニティの再構築など、多方面からのアプローチが必要になる。また、高齢者が社会の一員として活躍し続けられる仕組みづくりも欠かせない。健康寿命を延ばし、経験を生かせる場を増やすことで、社会全体の活力を維持できるはずだ。

少子高齢化は避けられない流れだが、悲観するだけでは前に進めない。社会の価値観や制度を柔軟に変えていくことで、むしろ新しい可能性を生み出す契機にもなる。多様な世代が支え合い、誰もが生きやすい社会を築くために、今こそ真剣な議論と行動が求められている。

AI 3

日本は現在、世界で最も深刻な少子高齢化に直面している。2025年現在、高齢化率は約29%を超え、国民の約3人に1人が65歳以上である。特に2025年は団塊の世代が全員75歳以上の後期高齢者となり、医療・介護需要が急増する「2025年問題」が現実化している。一方、合計特殊出生率は2024年に過去最低の1.15を記録し、2025年もさらなる低下が予想される。出生数はすでに70万人を割り、人口減少が加速している。

この構造的変化は、社会保障制度に深刻な負担をかけている。現役世代1.3人で高齢者1人を支える未来が迫っており、年金・医療・介護の持続可能性が問われている。また、労働力不足は経済成長を阻害し、地方の過疎化・地域消滅の危機を加速させている。

対策として、子育て支援の拡充、働き方改革、外国人材の積極活用、高齢者の就労促進などが進められているが、抜本的な出生率回復には至っていない。少子高齢化は単なる人口問題ではなく、国家の存続に関わる課題である。今こそ、結婚・出産・子育てを社会全体で支える意識改革と、AI・ロボット活用による生産性革命が急務である。私たち一人ひとりが「子どもを産み育てやすい社会」を本気で創る覚悟が求められている。

AI 4

日本は現在、世界で最も深刻な少子高齢化に直面している。2025年現在、高齢化率は約29~30%に達し、2070年には約39%に上昇すると予測される。一方、合計特殊出生率は2024年に過去最低の1.15を記録し、2025年もさらに低下する見通しだ。出生数はすでに70万人を割り込み、人口減少が加速している。

この現象は、社会保障制度に大きな負担をかけている。生産年齢人口 1.3 人で高齢者 1 人を支える時代が近づき、年金・医療・介護の財政は極めて厳しい状況にある。労働力不足は経済成長を阻害し、地方の過疎化や地域コミュニティの崩壊も進んでいる。

少子化の背景には、晩婚・非婚化、長時間労働、子育てと仕事の両立の難しさ、経済的不安、教育費の高騰など複合的な要因がある。政府は児童手当の拡充や育休制度の強化を進めるが、効果は限定的だ。

解決には抜本的な意識改革と構造改革が必要である。働き方改革を本気で進め、男性の育児参加を当たり前にし、若者が結婚・出産を前向きに考えられる社会環境を整えるべきだ。また、移民政策や AI・ロボット活用による労働力補完も現実的に検討する必要がある。

少子化は待ったなしの国家的危機である。今こそ本気で未来世代への責任を果たす時だ。

AI 5

現代の日本が直面する少子高齢化は、単なる人口統計上の変化ではなく、社会構造の根幹を揺るがす喫緊の課題である。労働力不足や社会保障制度の逼迫は、今のままのシステムでは限界を迎えることが明白だ。この危機を乗り越えるためには、「負担の再分配」と「テクノロジーの積極活用」という二軸の改革が不可欠だと考える。

まず、現役世代にのみ過度な重荷を課す現在の構造を改め、全世代で支え合う仕組みへの転換が必要だ。高齢者という定義を年齢で一律に区切るのではなく、健康な高齢者が意欲を持って社会参画できる環境を整えることで、「支える側」の分母を増やすべきである。

同時に、不足する労働力は AI やロボット技術で補完し、生産性の向上を図る必要がある。これは単なる代替ではなく、人間がより付加価値の高い活動に集中するための進化と捉えるべきだ。

少子高齢化は避けられない現実だが、それを「衰退」ではなく、より効率的で成熟した社会へ移行するための「転換点」にできるかは、私たちの決断にかかっている。個人の意識変革と大胆な制度設計を並行して進めることで、次世代に希望ある社会を引き継ぐべきである。

AI 6

現在、日本が直面している「少子高齢化」は、単なる人口統計上の変化ではなく、社会の基盤を揺るがす深刻な構造的な問題である。労働力不足による経済活力の低下や、社会保障制度の維持困難など、悲観的な予測が絶えない。しかし、私たちはこの現状を「避けられない衰退」と捉えるのではなく、新しい社会の形を模索する転換点とすべきである。

まず必要なのは、「多世代共生」を支える柔軟な制度設計だ。若年層への経済的支援や育児環境の整備を加速させることは、少子化対策の根幹である。それと同時に、元気な高齢者がその経験やスキルを活かせる「生涯現役社会」の構築も不可欠である。年齢という枠

組みを取り払い、誰もが社会の担い手として貢献できる仕組みが、労働力不足を補う鍵となる。

また、AI やロボット技術などのテクノロジーを積極的に導入し、少ない人数でも高い付加価値を生む社会への変革も急務である。

少子高齢化は、過去の成功体験が通用しない未知の領域である。しかし、この危機を「持続可能な成熟社会」へと進化するための契機と捉え、世代を超えた対話と革新を続けることで、私たちは希望ある未来を切り拓くことができるはずだ。

AI 7

少子高齢化は、日本社会が直面する最も深刻な構造的課題の一つである。出生率の低下と平均寿命の延伸により、生産年齢人口が減少し、社会保障制度の持続可能性が危ぶまれている。

この問題の背景には、経済的不安定さ、子育てと仕事の両立困難、教育費の高騰など、複合的な要因が存在する。若い世代が結婚や出産を躊躇する社会環境そのものを変革する必要がある。

対策としては、まず子育て支援の抜本的強化が不可欠だ。保育施設の拡充、育児休業制度の充実、児童手当の増額など、経済的・時間的負担を軽減する施策が求められる。同時に、働き方改革を推進し、長時間労働を是正することで、家庭と仕事の両立を可能にする環境整備が重要である。

また、高齢者の活躍促進も鍵となる。健康寿命を延ばし、意欲ある高齢者が社会で活躍できる仕組みを作ることで、人手不足の緩和と社会保障費の抑制が期待できる。

少子高齢化への対応は一朝一夕には実現しない。しかし、今行動しなければ、将来世代により重い負担を強いることになる。政府、企業、地域社会が一体となって、持続可能な社会の実現に向けて取り組むべきである。

AI 8

少子高齢化は、日本社会が直面する最も深刻な課題の一つである。出生率の低下と平均寿命の延伸により、生産年齢人口が減少し、社会保障制度の持続可能性が危ぶまれている。この問題の背景には、経済的不安や価値観の多様化がある。若い世代は、雇用の不安定さや教育費の高騰により、子どもを持つことをためらう傾向にある。また、仕事と育児の両立が困難な社会環境も、出生率低下の一因となっている。

少子高齢化がもたらす影響は多岐にわたる。労働力不足による経済成長の鈍化、年金や医療費などの社会保障費の増大、地方の過疎化など、社会全体に深刻な打撃を与えている。この課題に対しては、多角的なアプローチが必要だ。育児支援の充実、働き方改革の推進、女性の社会進出を支える環境整備などが求められる。同時に、高齢者が活躍できる社会づくりや、外国人材の受け入れ拡大なども検討すべきである。

少子高齢化は一朝一夕には解決できない構造的な問題だが、官民が連携し、長期的視点に立った施策を着実に実行していくことが重要である。未来世代のために、今こそ行動を起こすときだ。

AI 9

少子高齢化は、日本社会が直面する最も深刻な課題の一つである。出生率の低下によって労働力人口が減少する一方、高齢者人口は増え続け、医療・年金・介護などの社会保障制度への負担が拡大している。このままでは、現役世代の負担が過度に重くなり、経済の停滞や世代間の不公平感が強まるおそれがある。

少子化の背景には、雇用の不安定さや長時間労働、子育てにかかる経済的・精神的負担の大きさがある。これらの問題を解決せずに出生率の回復を期待することは難しい。保育サービスの充実や教育費の軽減、男女ともに育児と仕事を両立できる柔軟な働き方の推進が不可欠である。

一方で、高齢化は必ずしも「負担」だけではない。高齢者が健康で意欲を持ち、社会参加を続けられる環境を整えれば、貴重な経験や知識を次世代に生かすことができる。定年制度の見直しや生涯学習の充実は、そのための有効な手段であろう。

少子高齢化は短期間で解決できる問題ではない。国や自治体だけでなく、企業や個人も含めた社会全体で支え合う仕組みを築くことが、持続可能な日本社会への第一歩である。

AI 10

少子高齢化は、日本が長年にわたり直面している重要な社会問題であり、その影響は経済、福祉、地域社会など幅広い分野に及んでいる。出生率の低下によって若年人口が減少する一方、高齢者の割合は年々増加しており、労働力不足や社会保障費の増大が深刻化している。特に、現役世代が支払う税金や保険料の負担が重くなり、将来に対する不安が高まることで、結婚や出産をためらう人が増えている点は大きな問題である。

少子化の背景には、非正規雇用の増加や長時間労働、子育てにかかる費用の高さなど、個人の努力だけでは解決できない構造的な課題が存在する。子どもを育てながら働き続けることが難しい現状では、出生率の回復は期待しにくい。そのため、保育環境の整備や教育費の負担軽減、柔軟な働き方の推進など、社会全体で子育てを支える仕組みが求められる。

また、高齢者についても「支えられる存在」としてのみ捉えるのではなく、経験や知識を生かして社会に参加できる機会を増やすことが重要である。少子高齢化は避けられない現象だが、世代間の協力と制度改革によって、誰もが安心して暮らせる持続可能な社会を築くことができると考える。

人間 1 20代男性

少子化と高齢化ともに、問題点として金銭的なサポートの不足を挙げたい。少子化に関して、近年の物価高騰により、生活するための費用はかさむばかりである。その中で子どもを産めば、生活がひっばくすることは想像に難くない。政府は金銭面でのサポートを通じて、子どもを育てやすい環境づくりを進めていくべきである。

高齢化に関しても同様である。人生百年時代に突入し、高齢化の波が押し寄せている。健康で長生きをし、眠るように息を引き取る。私の理想とする生涯であるが、実際にはそうはいかない。医療や技術の発展にもかかわらず実用化には大きな壁がある。結果、誰もが何かしらの病を抱え、時には自分の子どもすら思い出せなくなり、体を少し動かすこともままならなくなる。そしてそのような人々は次第に増えている。これが現代の高齢化の現状である。そのために老人ホームをはじめとしたケアをする施設、そしてケアをする人々が存在しているが、ケアを受ける人数に対して不足していることは明らかである。ケアを充実させるため、そしてケアをする人々を増やしていくためにも、金銭的な支援は不可欠であると思われる。

少子化・高齢化対策のため、政府は財源を確保し、金銭的な支援を継続的に行っていくことが必要であると私は考える。

人間2 20代男性

子供を作らない理由として、子育てのお金が無いという理由を挙げる人は多いのではないかと。子育てには多くのお金が必要であるため、将来に不安のある人は子供を持つことに抵抗があるのではと想像した。

また、悪いことではないが、女性の社会進出も少子化の理由ではないかと思う。働きながらでは何人もの子供を産むことは難しいし、そもそも産むことすら諦める女性も多いただろう。男性が働くだけで妻と子供を支えられるだけの賃金が貰えれば、少子高齢化はある程度収まるのではないかと思う。

ただ、男性の育休取得率が高まっていたり4月から「子ども・子育て支援金」という制度が始まったりなど、子育てを応援しようという風潮は強まってきていると感じる。このまま子育てに対するネガティブ感情を減らしていくことが大切だと思う。

しかし、少子高齢化の1番の原因は、子供を作らなくても幸せになれる社会になったことだと思う。そのため、少子高齢化を完全に食い止めるのは難しいのではないかと。お金の問題を解決したとしても、動機自体が弱まっている現代ではこの問題が解決することはないと思う。

人間3 20代男性

少子高齢化によって発生する問題は、思いつく限りでは三つほどあります。第一に社会保険料など、高齢者を支える現役世代にとっての負担が増えること。第二に、特に中山間地

域など、地方の過疎化が進行すること。第三に、全体として人口減少が起こることによって、日本の経済規模が長期的に縮小することです。

少子高齢化が起こる原因としては、経済や医療技術の発展によって平均寿命が延びたこと、結婚観の変化やそれに伴う晩婚化・非婚化、若者の進学率上昇や貧困化など、様々な原因が挙げられます。ただし、少子高齢化は先進諸国に共通する現象であり、避けることはできなかつたでしょう。

この傾向が続くことは半世紀前からわかっていたことであり、何かとてつもない変化でも起きない限りは、止まることはないと思います。問題は、少子高齢化をどれだけ緩やかなものにできるかということです。

そこで唐突ですが、その解決策としてベーシック・インカムを提案します。ベーシック・インカムが実現すれば、その給付は、これまで市場経済の中では評価されることがなかったケア労働に対する報酬となり、子供を育てることに対するディスインセンティブを軽減することができます。

人間4 50代男性

少子高齢化は、国あるいは地方自治体にとって死活問題である。ここでは、その問題点を大きく2つ挙げる。

1つ目の問題点は、少子高齢化が国力や地方自治体の活力の低下に直結することである。現代の社会においては、働くこと＝経済活動であり、誰かが働いて初めて社会全体の収支がプラス方向へ動く。そしてそのプラス分を社会保障や医療、教育などコストが必要な事業等に割り振っていく。しかし、働く人が減り、支えられ人が増えるということは、経済活動で得られるプラス分よりも、社会保障等に必要のコストが増え、いろいろな面での社会全体の収支がマイナス方向へ移行することになる。それが極端に進むといわゆる「限界集落」になる。多くの働き手が国や地方自治体を支えているのである。

2つ目の問題点は、少子高齢化に対する特効薬がないことである。若い世代が子どもを作らない理由は、将来に対する不安、価値観の多様化、経済的な負担などが挙げられるが、どれも複合的な政策や対策が求められるものばかりである。少なくとも若い世代が安心して子育てができないと、出生率が増加していくことはないだろう。「子育ては、親育ち」とも言われる。子育てを通して、親も人間的に成長するのである。そういう意味でも、社会全体で、子育て世代を支える仕組みが求められている。

人間5 50代女性

日本で起きている深刻な社会問題の一つに少子高齢化が挙げられる。少子高齢化が進むと様々な問題を引き起こすが、中でも労働人口が減少することによる現役世代の負担増加が懸念されている。出生率を確実に上げる政策を打ち出すことが行政の急務となっている。未婚化、晩婚化や晩産化、教育費や住宅費の高騰、子育て支援体制が不十分であること等

課題は多いが、子育て世代が安心して暮らせる環境を早急に整えていかなければならない。

私には娘が2人いる。娘達には私がそうであったように、結婚し、子どもをもうけ、温かい家庭を築いて欲しい。とは言え、本人たちが一人で生きていくことや子どもを持たない選択を望むるのであれば、その気持ちを尊重したいと思う。ただ、先に述べたような現代の環境や経済的な不安が原因で、一步を踏み出せないような状況であるならば、親として、今の私に出来る限りの援助をしたい。

少子高齢化問題については、行政だけではなく、私達一人一人が国の重要な課題であることを十分に理解し、最大限取り組んでいく必要がある。問題解決に向けて、今、私自身に出来ることは何なのか、常に考えていきたい。

人間6 20代男性

少子高齢化は留まることを知らない。私という個人に一体何ができるのであろうか。

少子化が進むことで現役世代の負担が増えていくとされている。今後さらに少子化が進むということは、これからを担う若い世代、特に今の学生達は更なる困難に立ち向かわなければならない。

私は教師である。ならば、彼らに予測困難な時代を生き抜く力をつけることこそ、私にできる対抗策なのではないだろうか。どんな困難にも対応できる柔軟性、価値観やモノが飽和する現代においても新しい概念を創っていける創造性、ときに出会う苦しい瞬間や辛い瞬間も耐えられる我慢強さ、こういった資質能力を養うことが大切なのだ。生徒達のこういった能力を引き伸ばすことは、社会全体とっても非常に有意義である。なぜならば、少子高齢化が進む今こそ、働く人材一人一人の生産性を高める必要があるからだ。人材の数は減る一方、日本社会を持続させていくために必要なリソース（労働で得られるお金、時間、物資等の資源）は増え続ける。様々な社会的な諸課題を解決するために人材の生産性の向上が必要不可欠であることは自明だ。

少子高齢化と向き合いながら持続可能な発展ができる社会の実現に向けて、教育者としてできることを模索し続けたい。

人間7 20代男性

厚生労働省が発表した「令和6年(2024)人口動態統計月報年計(概数)の概況」によると、令和6年の出生数は68万6061人で、第1次ベビーブームが到来した昭和22年からの出生数の推移をみると過去最低を更新したという。これは統計データが残る明治32年からの出生数でも過去最低である。過去最多の出生数である昭和24年の269万6638人と比較すると、おおよそ200万人生まれてくる子どもが減った、問題提起するのが「少子化」の考え方である。

しかしながら、本当に目を向けるべきなのはそこではない。焦点を当てるべきなのは生まれてきてくれた尊い 68 万 6061 人の子どもたちの未来ではないだろうか。少子化対策として施されるものは、親世代の負担を軽減させるようなものが多いように思われるが、今の現役世代に少子化の責任を背負わせても、なにも変わらないのではないだろうか。子どもが少ない今こそ、子ども一人あたりに施すサポートの手厚さを高められるチャンスである。「子どもって良かったな」と、68 万 6061 人が 20 数年後に過去を顧みて幸せを感じ、願いを持って新たな命を授かりたいと思える、未来に向けた取り組みへとパラダイムシフトするタイミングにあるのではないだろうか。

人間 8 20 代女性

少子高齢化が問題視されている現代において、私は社会保障制度の見直しと、子育て支援の充実が必要だと考える。

高齢者が増加する一方で、社会保障制度を支える現役世代は減少する。今の日本は、増加の一途を辿る社会保障費を、減少を続ける現役世代で支える構図になっている。現役世代の負担を軽減する対策が大きな課題だ。現役世代の負担を軽減する対策として、高齢者の労働力・社会参加の活用や、地域での医療介護提供体制の整備が考えられる。働く意欲のある高齢者が年齢にかかわらず活躍できるよう、法改正を行っていくべきだ。また、それぞれの地域の実情に合った医療・介護・予防・住まい・生活支援が重なることなく一体的に提供される体制を整えることで社会保障費が削減できるだろう。

子育て支援には、経済的支援や母子保健・予防接種の医療面支援、保育所や認定こども園の整備といった保育サービスの充実など、多岐にわたる取り組みがある。子どもを持たない理由として最も多いのは経済的な負担への不安だ。そこで、児童手当の拡充や、収入が減る育児休業中の支援金制度などを整えていくべきだと考える。子どもを育てやすい環境を地域や社会全体でつくるために、少子高齢化とどう向き合っていくべきかこれからも考えていきたい。

人間 9 20 代男性

僕が少子高齢化について気になっている点としては、僕らの世代が 65 歳を超えた時の年金についてが非常に気になっています。ある程度仕事をしていて、貯金をすれば老後の生活での困り事はほぼ無いとは思いますが、やはり、長い人生何が起こるのか分からないので、自身が働いている時に払っている税金分はしっかり国から返してもらうことを強く望んでいます。そのため、納税額の面でも多く払う人に対する保証や対価を分かりやすくしてほしいと思います。格差を生むことはあまりいいことではないですが、日本の現状を見ると若者の数は減っていくばかりなので、自分の身は自分で守るためにも沢山稼ぎ、その分きちんと納税をし、自分の努力をしっかり反映される世の中になって欲しいと思います。

また、少子高齢化による人手不足も 20 年後くらいには深刻化すると思うので、日本の良い文化は残したまま海外誘致や外国人誘致なども積極的に行い日本の経済を活性化させる必要もあるのではないかと考えています。少子高齢化は他人事ではなく、自分のこれからに深く関わってくることなので、常に関心をもって意識していきたいと思います。

人間 10 20 代女性

少子高齢化による深刻な影響を和らげるには、子どもを増やすことと高齢者の健康寿命を延ばすことの二点に力を入れなければならないと考える。

まず、子どもを増やすことについては、若い世代が子どもを産もうと思える環境を作る必要がある。例えば産休や育休の取りにくさや、その後の仕事復帰のしにくさは、共働き家庭が増えている現代において出産に対する大きな障壁となる。また、最近では経済的な理由により子どもを諦めるという人も多いと聞く。そのような要因は政府が積極的に制度を用意することである程度は解消できるものであるため、国として子育て支援をさらに推進すべきだと考える。

次に、高齢者の健康寿命については、介護や医療を必要とする高齢者が増えるとその分社会保障費が増え、働き世代の負担が大きくなってしまう。そこで、高齢者の健康増進に力を入れることで、一人当たりにかかる社会保障費が減るとともに、高齢者が長く仕事を続けられるようになるかと考える。働き世代だけでなく高齢者もともに社会を支える一員になってもらうことは、高齢者の自己効力感や生きがいにも繋がるのではないだろうか。

【思い出文】

AI 1

旅の思い出を語るとき、いつも心に浮かぶのは、昨年訪れた小さな港町での出来事だ。朝早くに宿を出ると、潮の香りを含んだ風が頬を撫で、まだ静かな街並みに柔らかな光が差し込んでいた。石畳の道を歩きながら、どこか懐かしいような、初めて来た場所とは思えない安心感に包まれた。

港に着くと、漁師たちが網を干しながら談笑しており、その素朴な光景に思わず足を止めた。近くの食堂では、朝獲れの魚を使った定食が並び、湯気とともに漂う香りに誘われて席に着いた。店主が「今日は特にいい魚が入ったよ」と笑顔で話してくれ、その温かさが旅先ならではの嬉しさを感じさせた。

食後、海沿いの道を歩くと、青く澄んだ海がどこまでも広がり、波の音が心を穏やかにしてくれた。何気ない景色なのに、日常では味わえないゆったりとした時間が流れていた。夕暮れ時には空がオレンジ色に染まり、海面に映る光が揺れて、まるで絵画のような美しさだった。

この旅で感じたのは、特別な観光地や豪華な体験だけが思い出になるわけではないということだ。人の温かさや、ふとした瞬間の景色、ゆっくり流れる時間こそが、心に深く残る宝物になる。今でもあの港町を思い出すたび、胸の奥がじんわりと温かくなる。

AI 2

初めて一人で旅に出たのは、春の気配がようやく街に満ち始めた三月のことだった。目的地は、以前から写真で見て憧れていた小さな港町。電車を降りた瞬間、潮の香りと柔らかな風が頬を撫で、日常から切り離されたような不思議な解放感に包まれた。

町を歩くと、古い木造家屋が並ぶ細い路地や、地元の人々が穏やかに行き交う市場があり、どこを切り取っても絵になる風景が広がっていた。特に印象に残っているのは、夕暮れ時に訪れた岬の灯台だ。海に沈む夕日が空を金色に染め、波の音だけが静かに響くその場所で、時間がゆっくりと流れていくのを感じた。普段は気づかない自分の呼吸や心の動きが、自然の中で少しずつ整っていくようだった。

旅の終わりに立ち寄った小さなカフェでは、店主が淹れてくれた温かいコーヒーと、旅の話聞いてくれる優しい笑顔に癒やされた。見知らぬ土地でのささやかな交流が、旅の記憶をより深く温かいものにしてくれたのだと思う。

この旅を通して、景色だけでなく、自分自身と向き合う時間の大切さを知った。日常に戻った今でも、あの港町の静かな夕暮れを思い出すと、心がふっと軽くなる。旅は、場所だけでなく心にも新しい風を運んでくれるものだと実感した。

AI 3

去年の夏、初めての一人旅で訪れたイタリアの風景は、今でも色あせずに心に残っています。

ローマに降り立った瞬間、目の前に広がるコロッセオの壮大さに息を呑みました。石畳の道を歩きながら、2000年以上前の歓声が聞こえてくるような錯覚に陥ったのです。夕暮れのフォロ・ロマーノでは、茜色の空に浮かぶ遺跡があまりにも美しく、しばらく立ち尽くしてしまいました。

フィレンツェでは、朝のウフィツィ美術館でボッティチェリの「春」と対面したとき、胸が震えました。鮮やかな色彩と繊細な筆使いに、時間が止まったような感覚を覚えました。昼過ぎ、アルノ川沿いでジェラートを食べながら眺めた街並みは、絵本から飛び出してきたようでした。

そしてベネチア。ゴンドラに揺られながら細い運河を進むと、水面に映る古い建物と青い空が溶け合い、夢の中にいるようでした。サン・マルコ広場で鳩に囲まれながら飲んだエスプレッソの苦味さえ、甘い思い出に変わっています。

言葉が通じなくても、笑顔と身振りでつながれた人々との出会い、迷子になりながら見つけた小さな広場、予期せぬ美しさとの遭遇——。あの旅で得た「知らない場所で自分を解放する喜び」は、今も私の大切な宝物です。

AI 4

去年の秋、広島への一人旅は今でも私の心に鮮やかに残っています。

フェリーで宮島に着いた瞬間、目の前に広がる海に浮かぶ大鳥居の美しさに息をのみました。夕暮れ時、朱色の鳥居がオレンジに染まる光景は本当に幻想的で、思わず時間を忘れて見入ってしまいました。

ここで特に印象的だったのは、厳島神社の静かな雰囲気と、潮が引いた後に現れる鳥居の足元を歩けたことです。波の音と鹿の足音だけが響く中、まるで時間がゆっくり流れるような感覚に包まれました。

夜は宮島の小さな旅館に泊まり、畳の香りとお風呂の温もりに癒されました。翌朝は広島市内に戻り、平和記念公園を訪れました。秋の紅葉が原爆ドームを優しく彩っていて、静寂の中に歴史の重みと同時に、平和への願いが感じられました。

そして忘れられないのが、鉄板の上でジュージュー焼かれる広島風お好み焼き。キャベツの甘みとソースの香ばしさが絶妙で、一人で黙々と食べながら「また来たい」と思いました。

短い旅でしたが、心が洗われたような、温かい気持ちで帰路についたのを覚えています。あの風景と味は、忙しい日常の中で今も静かに私を支えてくれています。

AI 5

旅の醍醐味は、日常から切り離された景色の中で、自分自身を再発見することにあると思う。去年の夏、私は一人で瀬戸内海の小さな島を訪れた。有名な観光地を巡るつもりでいたが、不注意から予定していたバスに乗り遅れてしまった。次の便までは二時間。手持ち無沙汰になった私は、地図を閉じ、気の向くままに細い路地を歩き始めた。

そこには、ガイドブックには載っていない風景が広がっていた。潮の香りが染み付いた古い石垣、軒先で丸くなる猫、そして通りがかりに「暑いね」と声をかけてくれた洗濯物を干すおばあさん。予定通りに動いていたら、決して出会えなかった日常の断片だ。私は近くの防波堤に腰を下ろし、ただ静かに海を眺めた。

効率や計画ばかりを重視していた日々の慌ただしさが、波の音に溶けていくようだった。何もしない時間の贅沢さを、私はその時初めて知った。完璧な計画よりも、偶然の出会いや失敗の中にこそ、旅の真の輝きがあるのだと感じた。

旅から戻った今も、ふとした瞬間にあの穏やかな海と、おばあさんの優しい声を思い出す。目的地にたどり着くことだけが旅ではない。道中で揺れ動いた自分の心が、何よりの土産物になるのだ。次の旅では、あえて少しだけ「余白」を残して出かけようと思う。

AI 6

これまでの旅の中で最も心に残っているのは、昨年の夏に訪れた瀬戸内海の小さな島での出来事だ。都会の喧騒を離れ、ただ海を眺めるために訪れたその場所は、驚くほど静かで、時間が止まっているかのようだった。

特に印象的だったのは、高台にある古い展望台から眺めた夕暮れ時だ。空は次第にオレンジ色から深い紫色へと溶け合い、鏡のような海面がその色を静かに反射していた。私はただ、吹き抜ける潮風を肌を感じながら、その光景を眺めていた。日頃、時間に追われて忘れていた「何もしない贅沢」を、全身で享受しているような感覚だった。

また、道中で立ち寄った小さな食堂での出会いも忘れられない。店主の老夫婦が「どこから来たの」と温かく声をかけてくれ、採れたての魚を振る舞ってくれた。見知らぬ土地で受けたそのさりげない優しさは、どんな豪華な観光名所よりも私の心を深く満たしてくれた。

旅とは、単に新しい場所を見ることではない。日常から離れることで、自分の内側にある静かな声に耳を傾け、人の温かさに改めて気づくプロセスなのだと思う。島を離れるフェリーから遠ざかる島影を見つめながら、私は「また明日から頑張ろう」と、心の中に新しいエネルギーが満ちていくのを感じていた。

AI 7

夏の終わりに訪れた京都での三日間は、今でも心に鮮やかに残っている。

早朝の清水寺は、まだ観光客も少なく静寂に包まれていた。石畳の参道を登りながら、木々の間から差し込む朝日が霧のように立ち込める空気を照らし出す様子に、思わず足を止めた。本堂の舞台から見下ろす京都の街並みは、まるで時間が止まったかのように穏やかで美しかった。

二日目は嵐山を散策した。渡月橋を渡る風が心地よく、竹林の小径では天を突く竹が作り出す緑のトンネルに圧倒された。足元から聞こえる竹の葉擦れの音は、都会の喧騒を忘れさせてくれる自然の音楽だった。

最終日の夜、鴨川沿いを歩きながら、この旅で出会った風景や人々のことを思い返した。地元の小さな食堂で教えてもらった美味しい豆腐料理、道に迷った時に親切に教えてくれたお年寄り、すべてが温かい記憶として心に刻まれている。

旅は終わったが、そこで感じた感動や発見は、日常に戻った今も私の心を豊かにしてくれている。次はいつ、どこを訪れようか。そんなことを考えるだけで、また新しい旅への期待が膨らんでいく。

AI 8

あの夏、初めて一人で訪れた京都の記憶は、今でも鮮やかに心に残っている。

早朝の清水寺で迎えた朝日は、古い木造建築を優しく照らし、街全体を金色に染めていた。観光客のまばらな境内で、静寂の中に響く鳥のさえずりを聞きながら、数百年前の人々もこの同じ景色を見ていたのだと思うと、不思議な感動が込み上げてきた。

祇園の路地裏では、偶然出会った老舗の和菓子屋の主人が、店の歴史や菓子作りへの思いを語ってくれた。その丁寧な口調と、職人としての誇りに満ちた表情が印象的だった。いただいた季節の生菓子は、見た目の美しさだけでなく、繊細な甘さが口の中でゆっくりと溶けていく味わいに、日本の伝統文化の奥深さを感じた。

夕暮れ時、鴨川沿いを歩きながら眺めた夕焼けは、川面をオレンジ色に染め、カップルや家族連れが思い思いに過ごす平和な光景が広がっていた。

旅は、新しい場所を訪れるだけでなく、自分自身と向き合い、人生を見つめ直す貴重な時間でもある。あの京都での数日間は、私に「今を大切に生きる」ことの意味を教えてくれた、かけがえのない宝物となっている。

AI 9

大学時代の春休みに、親しい友人と京都を旅した思い出は、今振り返っても心の奥にあたたかく残っている。早朝の新幹線に乗り込み、まだ眠そうな街を後にした私たちは、車内で旅の計画を確認しながら、これから始まる数日間に胸を躍らせていた。窓の外に流れる景色が次第に変わり、京都に近づくにつれて、非日常の世界へ足を踏み入れる感覚が強くなったことを覚えている。

京都駅に到着すると、春の冷たい空気と静かな雰囲気を迎えてくれた。まず向かった鴨川では、満開の桜が川沿いに並び、淡い花びらが風に揺れていた。水面に映る桜と青空を眺めながら歩く時間は、とても穏やかで、日常の忙しさを忘れさせてくれた。清水寺では、石畳の坂道を登る途中で何度も立ち止まりながら、歴史ある街並みを楽しんだ。舞台から見下ろす景色は壮観で、京都という街が積み重ねてきた長い時間を感じた。

夕方には小さな和菓子屋に立ち寄り、抹茶と団子を味わった。甘さと苦味の調和が心地よく、歩き疲れた体に染み渡った。夜は町家を改装した宿に泊まり、布団を並べて将来の夢や不安、他愛のない話を遅くまで語り合った。観光名所だけでなく、友人と共有した時間そのものが、この旅をかけがえのない思い出にしている。

AI 10

去年の夏、私は友人と二人で京都を訪れた。それは、地図を片手に自分たちで考え、行き先を決める初めての本格的な旅だった。早朝の新幹線に乗り、少し眠そうな街並みを抜けて走り出すと、胸の奥に小さな高揚感が生まれた。車窓から見える景色が次第に変わっていくにつれ、日常から遠ざかっていく実感が強まっていった。

京都に到着すると、祇園の石畳や古い町家が静かに迎えてくれた。観光客で賑わう表通りとは対照的に、一本裏道に入ると空気が変わり、軒先の風鈴の音や、遠くから聞こえる寺

の鐘が心に残った。清水寺の舞台から見下ろした街並みは想像以上に美しく、しばらく言葉失って眺めていた。

夕方には鴨川沿いをゆっくり歩き、川面に映る夕焼けを眺めながら、時間が穏やかに流れていくのを感じた。夜、宿の近くで食べた湯豆腐はとても素朴な味だったが、その温かさが一日の疲れを優しく癒してくれた。この旅を通して、知らない土地を自分の足で歩き、人や風景に触れることの大切さを学んだ。今でもふとした瞬間に京都の空気を思い出し、また新しい旅に出たいという気持ちが湧いてくる。

人間1 20代男性

私は再来月で22歳となる。もう二十歳となってから二年がたつのかと感慨深く感じている。22年間で最も印象に残っている旅行は何かと考えた時、一番に思い浮かんできたのは、小学三年生の時に行ったモルディブの思い出だった。私は家庭の都合で小学三年生の時にインドで暮らし始めた。水道をひねっても飲める水は出てこない。一人で外にでることはできない。信号待ちで車が止まれば、物乞いが窓をこんこんとたたく。日本とは全く違う海外での生活に小学生ながら疲れ切っていた。そんなインド生活での初めての旅行が3泊4日のモルディブ観光であった。はじめに飛行機から見えたのは、一面エメラルドグリーン的大海だった。降り立ったときのなんともいえない蒸し暑さを未だに覚えている。水泳が得意だった私は初日から海で泳ぎ始めた。映画で見た色とりどりの魚たちや美しいサンゴ礁、目の前に広がる光景はインドでの暗い思い出を塗り替えるのに十分であった。一日中海で泳ぎ、ホテルに帰ってルームサービスの食事をする。時には家についていたプールで遊ぶこともあった。早く泳ぎたいという気持ちのあまり、Tシャツを着たまま水につかってしまったこともあった。今はもう手の届かないモルディブ旅行は、私の人生で最も思い出に残っていることの一つだ。

人間2 20代男性

12月に家族5人で三重にキャンプに行った。前回のキャンプは土砂降りの大雨だったから今回はどうかと少し不安だったが、キャンプ場は雲一つない晴天でホッとした。自分たちのコテージは川のすぐ側にあり、川の音が聞こえてきて心地よかった。コテージの前で焚き火を焚いていると次第に暗くなってきたため、晩御飯を用意した。今回も前回のキャンプと同様アヒージョを作った。ブロッコリーもプチトマトも美味しかったが、なんといっても厚切りのベーコンが一番美味しかった。そのあとは肉を焼いて、飯盒炊爨で炊いた米を食べた。キャンプで食べるご飯が一番美味しい。その後は高台に星を見に行った。晴天だったため、普段は見えない星までくっきりと見えて綺麗だった。流れ星も見ることができたためとても良い気分だった。

コテージに戻り、全員でボードゲームをした。自分は中々勝てなかったが、久しぶりに家族全員で遊んだため楽しかった。

両親がそろそろ50代ということもあり、あと何回遊びに行けるか分からないが、仕事を始めても年に1回は恒例行事として出かけたかったと思った。

人間3 20代男性

私は去年の3月に友人たちと沖縄に行きました。沖縄には（ゆいレールを除けば）電車がなく、公共交通機関も限られているので、移動手段としてレンタカーを借りました。私は運転手を名乗り出たので、移動の大部分は私の運転だったのですが、沖縄の道路事情に疎く、免許を取ってまだ日が浅かったこともあり、ヒヤリとする場面が何度かありました。友人たちには申し訳なく思っています。しかし運転自体は、沖縄というロケーションもあり、とても気持ちの良いものでした。

旅行の中で最も印象に残っているのは、野生のヤンバルクイナを見ることができたことです。沖縄本島の北部地域のことを「やんばる」と呼ぶそうですが、ヤンバルクイナはその地域に生息する固有種の飛べない鳥です。私たちは夜のやんばるの森を歩くツアーに参加しました。ヤンバルクイナは、私たちが通ろうとしていた道の頭上に伸びた木の枝の上にはいました。とても臆病な生き物なので、かなり近い場所から見ることができたことにガイドの方も驚いていました。またヤンバルクイナ以外にも、本州では見ることができないような珍しい生き物をたくさん見ることができました。とても貴重な経験だったと思います。

人間4 50代男性

うどんが大好きな私たち夫婦は、ここ数年、夏になると讃岐うどんを食べるために香川旅行に行く。今年もまた、その季節がやってきた。何度か行くうちに、必ず食べたい壱貫のうどん屋も出てくるし、その年初めて行くうどん屋も出てくる。今回はどんなうどんに出会えるか、胸をわくわくさせていざ出発。行程は2泊3日。1日目は移動日なので、うどんが食べられるのは1日目の昼からとなる。1日目の昼に3軒をはしごする。その中の1軒は、定番中の定番「山内うどん」。手打ち&手切りならではの不揃いでコシの強い麺が最高にうまい。そして夜にもう1軒。1日目は計4軒。2日目も、もちろん朝からうどん。昼もうどん。当たり前のように夜もうどん。これだけ食べると飽きそうなものだが、どれもこれもうまいのだ。最終日は、お腹が破裂することを覚悟した上で、5軒を回る強行軍。さすがに5軒目ではお代わりは無理だった。2泊3日のうどんの旅。訪れたうどん屋は、計12軒。香川出身の友人にそのことを話したら「香川県人でもそんなにうどんは食べないよ。その旅、楽しいの?」と言われた。分かってないなあ。好きなものを好きなだけ食べる。そんな旅が最高に楽しいのだ。

人間5 50代女性

母を連れて一泊二日の神戸二人旅をした。広島から新神戸まで新幹線で一時間余り。外の景色を眺めていたら退屈することもなく、あっという間に到着した。

高齢の母は体力に限界があるので、今回の旅行の目的は二つに絞った。一つ目は神戸牛のステーキを食べること。予約していたレストランに着いたのはランチタイムが終わる頃。空腹の私達は、神戸牛のあまりの美味しさにほとんど会話をすることなく、ひたすら食べ続けた。きめ細かく柔らかい肉質、甘く豊かな風味。傘寿を越えた母も、未だかつて見たこともない速さでステーキを平らげていた。

二つ目の目的は、私達の推しキャラクターのコンセプトホテルに泊まること。私達が、長い間宿泊することを夢見ていたこのホテルは、建物の内装、部屋の家具、アメニティまで全て、推しキャラクターがモチーフとなっている。現実を忘れ、まるで夢の世界にいるかのような幸せな時間を満喫した。

欲張りな私の旅行はいつも強行軍だったが、今回のようなゆったりとした旅行も、思いの外よかった。母と旅行に行くことが出来るのもあとわずか。季節が変わり暖かくなった頃、またどこかに行くことにしよう。

人間6 20代男性

旅行の醍醐味とは美しい景色や舌鼓するような食にある。しかし、便利になった現代においてはスマホ一つで行ったこともないような異国の景色に感動したり、有名な郷土料理を取り寄せたりすることができる。では、なぜ人は旅行に行くのか。私はその答えを見つけるヒントを高知旅行で得たのだ。四万十川でのサップ体験は本当に人生観を変えられる物だった。すこし冷たい水。透き通った空気。曇天で生憎の天気もどこか神秘的にすら感じた。初めて訪れる地なのに、どこか懐かしい。きっと私の中のホモサピエンスの部分が自然に帰ってきたことを喜んでいるのだ。日本最後の清流の上にはサップボードと私だけ。お気に入りの音楽も大好きなお菓子もそこにはない。聞こえてくるのは様々な鳥達の鳴き声。4時間のサップ体験は一瞬にして終了した。ガイドや妻とどんな会話をしたのかあまり覚えていない。始まってから終わるまでただただ感動をしていた。

なぜ私は旅行をするのか、それは私の中のヒトを見つけるためである。普段被っている〇〇〇〇〇（筆者注：人間7の氏名）という仮面の裏にある、生き物としても私を見つけるために私は旅に出る。社会に疲れた時、仕事で忙殺された時、きっと私はまた旅に出る。次はどこに行こうか。きっと日本全国至る所で、私のまだ知らない故郷が私を待っているはずだ。

人間7 20代男性

旅の醍醐味が準備じゃなくなった。何日も前から「これ着よ！」「いちおうこれも入れとくかぁ」「お菓子買っとかないと！」とウキウキ気分旅の余韻を前借していたあの頃の心

は、どこに行ってしまったのだろうか。ちょっとそこまで感覚の荷物を持って、3泊4日の名古屋大阪旅に出かけた。

夜行バスはしんどいぞ、と言われても学生の財布事情を考慮すれば一択である。23時半広島駅出発は意外にも、俺の心を躍らせた。まだ幼心の欠片が残っているようだ。ただ、3列シートの真ん中とは聞いてないぞ。右にも左にも向けられない体が、名古屋まで運ばれていく。遊園地に疲れて入場したのは人生初だ。そういえば絶叫系がダメだった過去の俺はどこ行った？ただ唯一、観覧車だけはどうしても耐えられない。「頼むから、微動だにしないでくれ」と、必死の形相で懇願する俺の顔を見て、あんたは貧乏ゆすりをはじめた。笑ってやがる、俺の扱い方をよく知っている。とりあえず、生きて地上に降りられてよかったと安堵する。観覧車は、俺が活着ていることを逆説的に伝えてくれる。あんたも観覧車もいい奴。長々と語りたものだが、それを語るにはあまりに余白が少なすぎるから、これぐらいにしとこ。

人間8 20代女性

今までの旅行で1番思い出に残っているのは、新婚旅行で行った沖縄だ。11月だったが、出発1週間前に季節外れの台風が発生。毎日、天気予報とにらめっこし、たびたび変わる進路に一喜一憂する日々を過ごした。旅行前の高揚感は半減してしまったが、出発前日に台風は過ぎ去り、無事出発することができた。

沖縄旅行のメインイベントはダイビングだった。ダイビングをするのは初めて。まずは呼吸法や機材の扱い方などをレクチャーしてもらう。最初は慣れなかったが、徐々に周りの景色を楽しむ余裕が出てきた。沖縄の海は透き通っていて、鮮やかだった。インストラクターに連れられ深く潜ってみると、海底にはサンゴ礁が、上を見上げると、カラフルな魚たちが優雅に泳いでいた。

また、現地の食を楽しむこともできた。ゴーヤチャンプルやサーターアンダギー、海ぶどう、沖縄そば、ジーマミー豆腐、ミミガーなど沖縄の食を堪能した。中でも1番美味しかったのは、アグー豚のしゃぶしゃぶだ。口の中ですりけるような食感と、甘さと旨みが凝縮されたあの味は忘れられない。豚の脂が美味しい！と思ったのは初めてだった。

夫婦で行った思い出の沖縄に、次は子どもも連れて家族で行きたいものだ。

人間9 20代男性

私の旅行の1番の思い出は、彼女で行った草津温泉です。毎回遠出をする時は何か記念日だったり、思い出のある日に行くのですが、その旅行は突発的に行こう！っとなって行ったので新鮮でした。それに加え5時間程車を交代で走らせて行ったので、そういった長距離運転も初体験で印象に残っています。

宿は TikTok で見た、かなり近未来的な雰囲気と和を混ぜたような旅館で、草津で有名な湯畑に非常に近く内装もとても綺麗でした。1泊2日で行ったのですが、1日目のお昼ご飯に食べた釜飯がとても美味しく、お昼からハイボールも飲んでしまいました。湯畑の方は、お昼と夜で行ったのですが、やはり、ライトアップされている夜の方が圧倒されました。また、夕食は少し高めのディナーをとり、フレンチとワインを堪能しました。2日目は、草津名物の湯もみのショーを鑑賞しました。正直最初の方は軽い阿波踊りのような感じだったので、何が魅力なのか分からなかったのですが、途中から、2メートルくらいの飛沫を上げながらダイナミックに湯を揉み始めたので、不意をつかれたような感覚で面白かったです。ほかにも、お土産を買ったりおみくじをしたりと充実した2日間でした。

人間10 20代女性

一番思い出に残っている旅は今年の夏に行った近畿旅行である。京都と奈良を中心に有名な観光地巡りをした。

京都では定番の金閣寺と清水寺に行った。京都に行くのは中学校の修学旅行以来だったので、ほぼ初見の気持ちでまわることができた。金閣寺も清水寺も記憶よりも大きく、ものすごい迫力だったが、その感動以上に京都が暑すぎて日陰を探すのに必死だった。私は南国出身なので暑さには強いと思っていたが、京都の暑さは尋常じゃなく、しかも蒸し蒸しするタイプだったのでかなり気が滅入った。たまたま冷房を求めて入ったダイソーで試しに折りたたみ式のうちわを買ってみたら、それが思いのほか便利で最高だったので、旅行したのは九月だったが2025年のベストバイに選出しておいた。

奈良ではもちろん片手にうちわを持ち観光した。鹿とへずまりゅうに会えると思って行った奈良公園では、鹿に追いかけられへずまりゅうには会えないという苦い思いをしたが、いい経験だったとポジティブに捉えたいと思う。その後は爬虫類館やレトロなショッピングモールに行ったが、ずっと頭にあったのは目を見開いた鹿だった。

なんだかんだあったが、一生分笑った最高の旅行だった。